

ISSN 1348-902X

自治医科大学看護学部年報

Jichi Medical School Annual Report of Nursing

第 3 号



2005

目 次

○ 特別報告

- 学生による若者向けの生活習慣病予防のためのリーフレットの作成
成人看護学教授 中村 美鈴 …… 5
- 日本ルーラルナースング学会
(Japan Society of Rural and Remote Area Nursing) について
精神看護学教授 永井 優子 …… 9

○ 委員会等報告

- | | | | |
|-------------|-----|-------|------|
| 人事委員会 | 委員長 | 野口美和子 | ……13 |
| 教務委員会 | 委員長 | 松田たみ子 | ……13 |
| 学生委員会 | 委員長 | 高村 寿子 | ……15 |
| FD・評価実施委員会 | 委員長 | 野口美和子 | ……16 |
| 紀要年報編集委員会 | 委員長 | 渡邊 亮一 | ……18 |
| 予算委員会 | 委員長 | 野口美和子 | ……18 |
| 国家試験対策委員会 | 委員長 | 篠澤 侃子 | ……19 |
| カリキュラム検討委員会 | 委員長 | 水戸美津子 | ……20 |
| 臨床指導者研修会 | 担 当 | 成田 伸 | ……21 |

○ 教育研究分野別報告

- | | |
|-------|------|
| 学部長 | ……25 |
| 一般基礎 | ……25 |
| 専門基礎 | ……27 |
| 基礎看護学 | ……29 |
| 地域看護学 | ……31 |
| 母性看護学 | ……34 |
| 小児看護学 | ……36 |
| 成人看護学 | ……37 |
| 老年看護学 | ……39 |

○ 研究業績録

- | | |
|------|------|
| 学部長 | ……45 |
| 一般基礎 | ……45 |
| 専門基礎 | ……46 |

基礎看護学	46
地域看護学	47
母性看護学	49
小児看護学	50
成人看護学	50
老年看護学	51

○ 資 料

2004年度（平成16年度）年譜	55
自治医科大学看護学部の概況	55
教職員名簿	56

特別報告

学生による若者向けの生活習慣病予防のためのリーフレットの作成

成人看護学教授 中村美鈴

【はじめに】

生活習慣病とは、食習慣・運動習慣・休養・喫煙・飲酒などの生活習慣がその発症・進行に関与する疾患群である。代表的な疾患のひとつに、糖尿病がある。2002年に厚生労働省が実施した糖尿病実態調査によれば、糖尿病が強く疑われる者740万人、および糖尿病の可能性を否定できない予備軍880万人を併せて、糖尿病患者は全国で約1,620万人となっている。これは、1997年度と同じ調査結果に比べて約1.2倍の増加となっている。

栃木県においては、健康診断における血糖検査で「精査を要す」の所見率が年々増加している傾向にある。そのため、栃木県の総合的な健康づくりの指針である「とちぎ健康21プラン」においては、糖尿病予防対策を重点領域とし、各種施策を展開している。

その施策のひとつとして、3年前から生活習慣病予防のための同世代向けのリーフレット作成の取り組みがなされている。同世代に焦点をあてたねらいは、生活習慣を確立する上で重要な時期にある学生自身が、同世代の立場から生活のあり様やニーズを把握した上で若者向けのリーフレットを作成し、啓蒙することにある。さらに、学生自身がリーフレット作成に参加することにより、生活習慣についての正しい知識や適切な自己決定能力を身につけ、健康づくりの若きリーダーとなる人材を育成することをねらいにしている。栃木県保健福祉部健康増進課は、平成15年度から同世代への糖尿病予防対策として、県内の大学生に働きかけ、同世代の若者向けのリーフレットの作成を開始した。

今回筆者は、平成15年度と平成16年度の同世代向けのリーフレット作成の指導助言者を委託され、学生と共にリーフレットの作成に関わった。

このような背景から、本稿では、栃木県の生活習慣病予防対策事業の一環として、同世代の若者に対する生活習慣病予防のリーフレット作成に取り組んだ学生の取り組みの過程と成果および今後の課題について報告する。

【リーフレット作成者の募集】

まず、看護学・医学・栄養学関連の大学ならびに専門学校に、「同世代向けのリーフレット作成者」募集のチラシを掲示した。それ以外に、各大学・学校で、学生の目に付きやすい場所や休憩場所にチラシを置き、有償ボランティア（以下、作成者という）を募集した。作成者の募集にあたっては、チラシ以外に、推薦も教員に依頼した。募集内容は、表1のとおりで、作成者の活動を明記した。

応募してきた学生は、自発的にリーフレット作成者として応募してきた者と、教員からの推薦を受け、応募してきた者とがいた。最終的には、医学・看護学・教育学・芸術学・栄養学・保育学の学生から応募があった。

表1 募集内容

- ・リーフレット作成委員会のメンバー募集：若者の生活習慣予防に興味・関心があり、啓発資料としてのリーフレット作成に取り組みたいと希望する人
- ・構成委員：大学生等各年10名程度（公募）、医療・健康教育分野専門家等3名程度
- ・期間と回数：5月に1回、夏休み期間中に3回
- ・会場：宇都宮
- ・報酬：1回2～3時間程度につき5,000円（交通費込み）
- ・応募の動機：自由記述

【募集の結果】

募集の結果、平成15年度は6大学より19名、平成16年度は4大学より13名の応募があった。応募票の記載内容、具体的には応募の動機、興味・関心の程度、取り組みの姿勢などにより、応募者のなかから平成15年度は6大学から12名を、平成16年度は4大学から10名を選考した。

【リーフレットのテーマ】

リーフレットのテーマは、生活習慣病予防としての重要性と作成者達の関心を考慮して検討され、平成15年度は「糖尿病」、平成16年度は「適正体重」とすることに決定した。

【リーフレット作成の過程】

選ばれた作成者は、生活習慣病予防のリーフレットの作成に取り組んだ。リーフレット作成のための検討を行う会として「リーフレット作成検討会」が組織され、検討会の開催日時は可能な限り作成者と指導助言者のいずれもが出席できる日が調整された。その結果、作成者全員が参加する委員会は、平成15年度は82日間に5回、平成16年度は75日間に4回開催された。

指導助言者は、リーフレット作成に必要な知識を作成者に身につけてもらうために、平成15年度はリーフレットのテーマが「糖尿病」であったことから、健康教育については本学部の高村寿子教授が、糖尿病の病態については内科医師が、糖尿病に対する看護支援については筆者が担当し、簡単な講義を行った。

同様に、平成16年度はリーフレットのテーマが「適正体重」であったことから、健康教育については高村寿子教授が、適切な食事については

栄養学の立場から栄養士が、患者教育・食事指導に対する看護支援については筆者が担当し、適宜必要な知識を提供した。講義以外にも、市販のリーフレットについて、パンフレットとの違い、体裁、ボリューム等の情報を適宜提供した。

リーフレット作成に対するイメージ化ができた後、作成者達は、自発的に作成のスケジュール、作成方法、内容、作成後の配布方法などの検討を行った。作成者達は、定期的な委員会だけでは、リーフレットの内容を深めるために十分な時間が確保できず、それ以外に、集合できるメンバーで自発的な委員会を、平成15年度、平成16年度とも5回程度開催した。

【実際に作成したリーフレット】

平成15年度は「タケオとノリコのビバ!健康」の題名で、A5版8面のリーフレットを作成した(図1)。主な内容は、若者の生活習慣に関するチェックシート、生活習慣の改善を要する場合の解説やアドバイスなどである(図2)。リーフレットの内容もさることながら、デザイン、色彩などを、作成者達が主体的に決定していった。ただし、いくぶん年長者がイニシアティブをとる傾向にあった。



図1 「タケオとノリコのビバ!!健康」の表紙と裏表紙

リーフレットに記載する内容は、指導助言者が必ず確認した。最終的にできあがったリーフレットは、口調、字体、絵などに多くの工夫を凝らし、オリジナルキャラクターを配したイラスト入りで、同世代の若者が手にとって見たくなるようなものとなった。

平成15年度の作成者のなかに美術デザイン専攻の大学生がいたため、デザインについては、全員で意見を交換してアイデアを創り出すというより、特定の技能をもつその学生に他の学生が依存する傾向が見られた。

一方、自発的な無償の集まりに対する不満が一部の学生から出され、グループダイナミクスに影響した。報酬に関する認識の相違は、作成過程に大きく影響する。また、作成者にとっては重要な要素であるため、平成16年度は、初回の集まりの際に報酬に関する説明がなされた。

平成16年度は「あなたの体重何キロですか？」の題名で、A5版12ページのパンフレットを作成した。主な内容は、若者が関心をもつダイエットが正しく行われるための知識、適正体重について、

適正体重を維持するための生活、また生活習慣ならびに生活習慣改善の重要性などである。特に目を引いたのは、それらの内容について現代風の人物が登場し、ストーリー化されるという工夫が見られたことである。さらに、若者が好感をもてる体裁であった。

平成16年度もリーフレットの内容はもちろんのこと、デザイン、色彩すべて、作成者達が自主的に作成していった。特に、行動変容やアプローチのトレーニング経験をもつ者が、強いリーダーシップを発揮した。

リーフレットは、市販の資料に比べ、オリジナルキャラクターを配したイラスト入りの同世代の関心が高い装丁となった(図3)。

平成15年度、平成16年度とも、作成者達の年代に密着した生活内容に関連するテーマであり、作成者自身の生活習慣病への知識や関心が高まったといえる。また、専攻の異なる他の作成者への関心が高まり、理解が深まったことなどが成果としてあげられる。



図2 「タケオとノリコのビバ!!健康」のなかの生活習慣に関するチェックシート



図3 「あなたの体重何キロですか？」のなかのイラスト入りのページ

【まとめ】

生活習慣病予防に関しては、生活の自立性が増し、生活習慣が確立すると考えられる大学生の時期の重要性が認識されている。今回の取り組みは、生活習慣病予防についての意識を早期から高めるための若年層へのアプローチのひとつであった。同世代の若者による行動変容アプローチが有効なのは、性教育の分野におけるカウンセリングや講演といった手法に限定されている。そのようななかで、今回行った試みは、斬新であり、有意義であったと考える。ただし今回は、リーフレット作成への取り組みにとどまり、作成したリーフレットを配布し、その後の若者の生活習慣予防についての意識ならびに生活の改善について評価するまでには至らなかった。

以上から、平成15年度、平成16年度の学生有志によるリーフレット作成への取り組みの成果としては、以下の3点があげられる。

1. 市販の資料に比べ同世代の関心が高い資料となった。
2. 作成者自身の生活習慣病への知識や関心が高まった。

3. 専攻の異なる他の作成者への関心が高まり、理解が深まった。

一方、今後の課題としては、以下の4点があげられる。

1. 作成者の報償に対する認識を事前に統一しておく必要がある。
2. 年長者や行動変容アプローチのトレーニング経験がある者が進行の中心となる傾向がある。
3. 資料の装丁が特定の作成者の技能に依存する傾向がある。
4. 作成したリーフレットを同世代の若者に配布し、生活習慣に対する意識が改善したか否かを評価する必要がある。

なお、本稿は、第64回日本公衆衛生学会学術総会で発表した内容に、加筆・修正を加えたものである。

日本ルーラルナーシング学会 (Japan Society of Rural and Remote Area Nursing) について

精神看護学教授 永井優子

保健医療の面から見た遠隔地（過疎地域、豪雪地帯、山村、離島等、以下「へき地」という）における医療提供体制の確保は、わが国の医療政策における重要課題である。これまでも「へき地」保健医療対策の推進、医療計画の導入により、各都道府県等における計画的な取り組みが求められ、国としてもこれを支援してきている。それにもかかわらず医療の地域偏在は依然として大きな問題である。「へき地」においては、医師の確保が最優先問題とされるが、保健医療福祉資源が乏しい地域だからこそ、健康の保持増進や住民の主体的な保健活動への支援やチーム医療が重要になる。平成16年2月に、地域医療に関する関係省庁連絡会議により出された『へき地を含む地域における医師の確保等の推進について』においても、医療水準の向上のために、医師はもちろんのこと、看護師への生涯教育の提供の重要性が述べられている。

「へき地」で働く看護職の調査については、20数年以上前に駐在保健婦の活動が数件ある程度であった。最近では、看護系大学の増加に伴い、設置されている地域の特徴に合わせて、あるいは、看護の行き届いていない部分にも目を向けた結果として、県レベルで「へき地」における看護活動の質の向上や人材育成に焦点を当てている大学も見られるようになった。

自治医科大学看護学部では、開設と同時に、「へき地」に勤務する看護職を対象に調査（平成14～15年度）を行った。その調査結果から、「へき地」診療所を利用している患者の中心年代は65歳以上であり、高齢者がその地域に住み続けるために、自立した生活をいかに延長できるか、そのため高齢者に対する看護活動をどう展開していくかということが、「へき地」における大きな課題であることが明らかになった。また、全国の傾向と同様、生活習慣病や慢性疾患が多くみられ、そこには地域に特有な食文化や食料保存の習慣等が関連している場合もあり、その地域の生活状況を考慮しながら、生活習慣病の予防から自己管理まで支援していく看護活動が必要であると考えら

れた。さらには、地理的状況から二次医療機関・後方支援病院まで遠く、救急時の対応、受診・疾病発見の遅れ、通院負担等の問題、島や豪雪地帯等の閉ざされた生活が関連していると考えられる精神面の問題、社会資源の活用や社会資源利用に関する住民の意識の特性にも看護が対応していく必要がある。

一方、「へき地」に勤務する看護職は、診療の補助以外に、救急時・医師不在時の対応、住民に身近な存在としての相談的役割、関係者・機関と連携したケアチームの一員としての在宅ケアの実施、社会資源利用にかかわる援助、地域住民のつながりを把握し、それを活かした看護活動等、幅広い活動を実施している状況が明らかになった。

しかし、研修・研鑽の機会が少なく、新しい情報が入手しにくいこと、相談できるバックアップ機関やサポート者がいないというサポート体制の不足も明らかになり、「へき地」に勤務する看護職の研修・サポート体制の構築が課題であると考えられた。

このように、「へき地」に勤務する看護職には、プライマリ・ケアの担い手として、小児から高齢者まで、また、慢性期から救命救急、終末期までと、あらゆる発達段階、あらゆる健康レベルの対象への看護が求められる。幅広い総合的な能力を求められる「へき地」看護活動のための人材育成、「へき地」に勤務する看護職のための生涯を通じた研修・サポート体制が必要であり、このことが地域ケアの水準の向上に資すると考える。

そこで、「へき地」、ならびに「へき地」を含む地域の中核病院・保健所に勤務する看護職やルーラルナーシングに関心を寄せている教育研究者に意見を聞き、その結果、研究活動を活発にし、その成果を「へき地」看護の人材育成や「へき地」における看護実践者の生涯学習に還元していくことが必要との結論に達した。

以上の背景から、自治医科大学看護学部 野口美和子学部長を理事長、副理事長を千葉大学看護学部 石垣和子学部長として、看護学部教員42名のほか、教育研究者および「へき地」を含む地域

の中核病院の看護職等、計76名で、平成17年3月3日に日本ルーラルナースング学会を設立した。

日本ルーラルナースング学会の目的は、研究の充実を図り、活発で現実的な意見交換を行い、海外教育研究者との交流も図りつつ、その成果をルーラルナースングに携わる教育研究者・実践者と共有していくことである。そして、「へき地」における看護について、現在個々になされている研究から得られる知見の統合・体系化を図り、日本におけるルーラルナースングを確立することを目指すことである。本学会は、事務局を自治医科大学看護学部内に置き、今後年1回の学術集会和総会を実施するほか、学会誌の発行、ホームページ <http://www.jasrun.org> を用いた広報普及等の活動を行う。

なお、本学会設立を記念して、平成17年4月2日(土)・3日(日)「Rural and Remote Area Nursing 国際研究集会—その実践、教育、研究—」を開催した。4月1日(金)のWelcome Partyで開始し、1日目は自治医科大学地域医療情報研修センターにおいてルーラルナースングに関する海外の研究者と国内の実践・研究者を招聘した講演会、2日目は看護学部において研究ミーティングを実施し、2日間で延べ107名が参加した。

1日目は、午前中、野口理事長の開会の挨拶に引き続き、松田たみ子教授を座長に第1部「へき地における看護実践と教育」として、Kathryn Crooks氏(カナダ)の講演「Rural Nursing is More Than Just Learning Tasks: A Canadian Perspective」、菊池睦子自治医科大学附属病院看護部長の講演「へき地等地域病院への派遣が看護実践能力にもたらす教育的効果」が行われた。午後は、宮崎美砂子千葉大学看護学部教授を座長に、第2部「へき地における看護実践と研究」として、Helli Kitinoja氏(フィンランド)の講演「Elderly People Living Independently at Home Using Home Telecare and Regional Seamless Services」、大湾明美沖縄県立看護大学助教授の講演「沖縄県の一離島における高齢者の地域ケアシステム構築」、Karen Francis氏(オーストラリア)の講演「Overview of Rural Nursing in Australia」が行われた。

2日目は午前中に研究ミーティングとして、3つの分科会が行われた。分科会1は「へき地における看護実践と教育」で、篠澤侘子自治医科大学看護学部教授をファシリテーターとして、講演者で

あるKathryn Crooks氏と菊池睦子氏が参加して、保健医療福祉機関等の機能と役割を踏まえたへき地における看護実践の課題、学士課程教育、卒後研修、大学院を含めた「へき地」における看護実践の生涯教育、Rural and Remote Area Nursing教育への取り組み方について検討した。分科会2は「へき地におけるネットワークづくりと研究」で、松田たみ子自治医科大学看護学部教授をファシリテーターとして、講演者であるHelli Kitinoja氏と大湾明美氏が参加して、「へき地」に住む人々への保健医療福祉サービスの提供における課題、「へき地」に住む人々への看護支援のためのネットワーク作り、遠隔地域への看護技術支援システム開発のための研究の課題と進め方について検討した。分科会3は「へき地における看護実践と研究」で、成田伸自治医科大学看護学部教授をファシリテーターとして、講演者であるKaren Francis氏が参加し、へき地看護実践における孤立性や雇用の確保の困難さ等の課題を探求し、その解決に向けて考えていくための看護実践と研究的取り組みと、共同研究の可能性について検討した。

委員会等報告

人事委員会

委員長 野口美和子

「自治医科大学看護学部教員の選考方法等に関する内規」第2条の規定により、次のとおり人事委員会が開催された。

なお、看護学部が完成する平成18年3月31日までの専任教員（助手を除く）については、文部科学省の専任教員採用等年次計画変更を考慮して選考と採用を行った。

第1回（平成16年5月27日）

欠員が生じている領域の教員（講師）を補充するため「自治医科大学看護学部教員の選考手続・資格基準規程」に基づき申請書類が提出された講師候補者1名（基礎看護学領域）を選考した。

第2回（平成16年10月7日）

- (1) 平成16年度後学期非常勤講師（5名）及び平成17年度非常勤講師（6名）の任用が了承された。
- (2) 平成17年度教育支援者23名の任用が了承された。

第3回（平成16年11月18日）

- (1) 欠員が生じている領域の教員（講師）を補充するため「自治医科大学看護学部教員の選考手続・資格基準規程」に基づき申請書類が提出された講師候補者1名（老年看護学領域）を選考した。
- (2) 平成16年度後学期非常勤講師（2名）及び平成17年度非常勤講師（1名）の任用が了承された。

第4回（平成17年1月20日）

平成17年度非常勤講師14名の任用が了承された。

第5回（平成17年2月17日）

- (1) 退職予定（精神看護学助手）に伴う補充及び欠員が生じている領域の教員（助手2名、母性看護学）を補充するため「自治医科大学看護学部教員の選考手続・資格基準規程」に基づき申請書類が提出された助手候補者3名を選考した。
- (2) 平成17年度非常勤講師5名の任用が了承された。

第6回（平成17年2月24日）

- (1) 退職予定（成人看護学教授）に伴う教員を補充するため「自治医科大学看護学部教員の選考手続・資格基準規程」に基づき申請書類が提出された教授候補者1名を選考した。
- (2) 平成17年度非常勤講師2名の任用が了承された。

教務委員会

委員長 松田たみ子

教務委員会は、毎月第2木曜日の13時15分から定例委員会の開催日とし、平成16年度は8月を除き各月に開催で11回、臨時委員会を4回（4月・9月各1回、3月2回）開催した。平成16年度は委員の任期による交代の年度であったが、構成員には基本的な変更はなく、一般教育1名、専門基礎1名、看護学の各領域より1名の9名である。教務委員会内の役割分担および委員会に所属するワーキンググループの構成員の交替が一部あり、平成16年度の教務委員会の構成と役割分担については、表1に示すとおりである。

表1 平成16年度教務委員会の役割・担当者

役割	担当者
委員長	松田たみ子
副委員長・時間割	川口 千鶴
実習病院等連絡調整	成田 伸, 水戸美津子, 春山 早苗
学年担任	1年生：高村 寿子, 里光やよい 2年生：塚越フミエ, 大久保祐子 3年生：成田 伸, 西岡 和代
編入生単位認定・履修指導	川口 千鶴, 成田 伸, 山本 洋子, 亀田 真美
図書ワーキンググループ	永井 優子, 余語 琢磨, 岸 恵美子, 朝野 晴美, 山本 洋子, 亀田 真美
既修得単位認定ワーキンググループ	高村 寿子, 竹田 俊明, 松田たみ子
講義・実習予算ワーキンググループ	竹田津文俊, 成田 伸, 余語 琢磨

平成16年度教務委員会での主な審議内容は表2に示すとおりである。教務委員会の所轄事項である、学科課程、授業及び試験に関する事項に関して、開設3年目の新規の重要事項は、3学年まで進行してきたことと（3回生の入学）、編入1回生を3学年に9名迎え入れたことである。3年次生の授業科目はすべて初めての進行であり、前学期は3年

次生のみ履修の領域別実習の5科目が開講され、4月12日より7月30日まで、5クールで行われた。後学期の新規開講科目は7科目の必修科目、9科目の選択科目が開講された。後学期の必修科目のフィールド実習は、編入3年次生も履修する実習科目である。

編入生は、一括認定及び個別認定される単位とあわせて、2年間で卒業要件を満たす単位の履修が可能となるように、編入生履修指導委員が個別指導を行い、履修科目を決定してスタートした。編入3年次は1年次から3年次までの開講科目のうち、認定科目以外の必要単位を卒業要件を満たされるように履修する必要があるため、特に必修科目の授業（授業変更などの際）や試験の時間割の重複が生じたことがあり、注意が必要であった。

実習科目の実施に関しては、受け入れ施設との事前打ち合わせが必要であり、特に附属病院で実習を行うにあたっては、9月に後学期に行われる実習について、および3月に前学期に行われる実習について、実習説明会を全体で行うという方式で実施してきた。今年度も同様に実施し、前学期では実習説明会の後、看護部主催で臨床指導者の実習指導に関する勉強会が、看護学部教員も参加して行われた。これまで4年間に行われる全ての実習について、全体での説明会形式で実施してきたが、平成17年3月の実習説明会をもって全体での形式は終了とし、次年度からは、実習を行う領域毎で看護部と調整して実習についての打ち合わせを行う機会を設ける形で進める予定である。

学生の入学、退学、休学等に関する事項では、9月の委員会において、2年生2名の後学期間休学について、3月の委員会で、先の休学していた2名の内1名の次年度からの復学について審議した。また3月の臨時教務委員会において2年生1名と1年生の1名退学について審議した。

定期試験に関する課題は、3年生のフィールド実習の期間中に1・2年生の定期試験期間が設定されていたため、講義や1年次生の病理学等の実習との重複の調整が必要となった。実習内容と試験日程の調整を事前に行い、調整した。次年度にはさらに周到な計画が必要である。

図書の整備や図書の利用に関する事項では、購入図書・雑誌のアンケート調査を行い、購入図書の決定について審議した。また、その他、新入生への図書館利用ガイダンス、および2年生への文

献検索ガイダンスを、図書館運営委員と図書ワーキンググループが中心となって行った。

また、助産師国家試験受験資格の修得に関連する科目（4年次開講）の選択者を決定するための「選択学生選考の決まり」を準備し、手続きに基づいて平成16年度の成績が提出された後、選択履修する15名の学生を決めた。

検討項目の中で、継続しての審議が必要であったのは、次年度が4学年揃う年度になるため、学年暦および時間割に関してであった。これは、これまで、全学年が進行していなかったことによる、時間割の空きを使っていた箇所もあり、4学年が揃った場合の時間割に戻す必要があり、担当教員（特に非常勤講師）の都合とあわせて調整しなおす必要があったことが主な理由である。早期から検討に取り掛かったが、時間割が決定するまでには長い期間を要した。

その他、再試験手続きの押印、履修届の行い方について審議し、再試験手続きに限り印鑑を省略すること、必修・選択両科目とも履修届を提出することに変更した。

また、次年度1回生が4年生になり、最初の自治医科大学看護学部の卒業生が出ることから、学長の特別講義の機会を設けることが了承され、次年度に準備をしていくことを決めた。

表2 平成16年度教務委員会議題

回	年月日	審議事項・報告事項
1	平成16年4月1日	・教務委員会年間スケジュール確認 ・実習計画策定費の配分 ・オリエンテーションに関する確認事項
臨1	平成16年4月22日	・既修得単位の認定（編入生、1・2年生）
2	平成16年5月13日	・前学期履修申請状況 ・講義・実習予算配分 ・編入生の履修計画について
3	平成16年6月10日	・前学期定期試験について ・見計らい図書等について
4	平成16年7月15日	・前学期定期試験日程について ・平成17年度学年暦について ・平成17年度時間割について ・実習について
5	平成16年9月9日	・学生の休学について ・再試験・追試験日程について ・補習実習について ・シラバスの修正と平成17年度時間割作成準備 ・平成16年度講義・実習予算執行状況について ・平成17年度授業関係予算要求について ・図書について
臨2	平成16年9月22日	・前学期単位修得状況 ・平成17年度学年暦について ・平成17年度授業関係予算要求について
6	平成16年10月14日	・既修得科目の認定 ・後学期履修申請状況 ・平成17年度学年暦 ・図書について

7	平成16年11月11日	・シラバスの修正 ・平成17年度時間割 ・再試験手続きの期限について ・必修科目の履修届について ・CINAHLの利用について
8	平成16年12月9日	・シラバスの修正と平成17年度時間割作成 ・卒業研究に関する事
9	平成17年1月13日	・平成17年度時間割について ・3年生後学期定期試験日程 ・平成17年度科目等履修生の募集について ・追実習について ・学生の改姓届について
10	平成17年2月3日	・1・2年生後学期定期試験日程について ・追試験について ・必修科目の履修届について ・中間テストについて ・図書について
11	平成17年3月10日	・追試験・再試験の日程 ・学生の復学について ・病院実習における委託契約等について ・平成17年度学年暦・時間割の学生への周知時期について ・特別講義について ・平成17年度教務委員会役割分担について
臨3	平成17年3月24日	・学生の復学について ・進級の認定について
臨4	平成17年3月28日	・学生の履修計画について ・学生の退学について

学生委員会

委員長 高村寿子

開部3年目で初めての3年編入生を迎え、3学年総勢310数名と学園生活もより活発化してきた。3学年に進級し、そろそろ将来の進路を見据えて生き生きと充実したキャンパスライフを過ごす学生がいる一方で、将来の進路や現在の生活に対する不安や悩みやストレスを抱えた学生も、一握りではあるが見受けられるようになってきた。当然、彼らを支える学生委員会の果たす機能・役割、中でも学生の厚生補導に関する事項、学生相談・進路、特に就職対策などに関する事項に対する対応の強化が必須となってきた。

平成16年度学生委員会は、第1回を4月1日の午後1時15分から開催し、8月の夏期休暇を除き計11回開催した。委員会構成は表1に示すようである。この他に表1の脚注に示すように、学生委員以外の寮務主事1名、および平成15年度選出された学生サポートチーム6名と、今年度新設された進路プロジェクトチーム6名のメンバーにより積極的に活動した。

表1 学生委員会の構成および役割

委員名	領域	役割
高村 寿子	一般基礎	委員長・奨学生選考・学年担任
竹田 俊明	専門基礎	学生健保理事
松田たみ子	基礎看護学	
篠澤 侑子	地域看護学	車両委員・寮務主事
永井 優子	精神看護学	保健委員
成田 伸	母性看護学	
川口 千鶴	小児看護学	
塚越フミエ	成人看護学	奨学生選考・学年担任
水戸美津子	老人看護学	進路プロジェクトチームリーダー

*寮務主事：中村美鈴（成人看護学）

*学生サポートチームメンバー：

余語琢磨（一般基礎）、高村寿子（一般基礎）、大久保佑子（基礎看護学）、春山早苗（地域看護学）、西岡和代（精神看護学）、高木初子（老年看護学）

*進路プロジェクトチームメンバー：

水戸美津子（老年看護学）、川上 勝（基礎看護学）、春山早苗（地域看護学）、大原良子（母性看護学）、村上礼子（成人看護学）、高木初子（老年看護学）

審議検討された議題は、表2に示すようである。開学から最優先されてきた学生の健康管理と心の相談システムを継続審議した。その最終的対応として、学生のさまざまな健康診断などの受診記録をファイルし、それに基づいてセルフケアができるような健康手帳を作成配布した。他方、心の健康に関して学内、とくに学部内での対応を望むニーズが高いことから、看護学部内に心の相談室を設置し、非常勤のカウンセラーを配置したところ、学生の積極的な活用がなされた。

また、学園生活を支える経済的な支援として、長期経済不況の影響を受けている学生のために、育英会や自治医大就学資金制度の積極的な活用を支援した。

学生寮関係では、待望の新寮が建設され、寮自治会と看護学務課及び寮務主事が一丸となって、旧寮から新寮への引越しがスムーズに完了した。さらに、新寮に移って先ず年間行事である防災訓練を寮自治会とともに計画するなど、積極的な適応を図るべく指導助言した。

学業や部活など学園生活が充実して快適に送れるよう支援する学生サポートチームが昨年設置され、学生サポートチームメンバーと協力しながら、学生のニーズ調査実施結果を踏まえて、平成17年度の看護学部学生自治会の発足を目指して具体的な活動を展開している。

また、平成17年度にはじめての卒業生を送り出すことから、将来の進路（就職・進学など）決定に役立つ情報を提供し、相談を受ける機能を備えた進路プロジェクトチームを発足させた。具体的

には、自治医大附属病院看護部と連携し、進路ガイダンスを作成し、学生サロンに進路情報コーナーを設置した。

表2 平成16年度教務委員会議題

回	年月日	議 題
1	平成16年4月1日	①学生委員会の役割分担について ②学生サポートチームの報告について ③3年次早期健康診断の結果について ④心の健康相談ネットワークについて
2	平成16年5月6日	①学生役割(各種委員など)分担について ②消火器訓練実施結果について ③学生サポートチームの経過報告について
3	平成16年6月3日	①学生の健康管理<健康手帳・学生へのカウンセリングの周知>について ②新寮に対する寮生の要望について ③学生サポートチームの経過報告について ④心の相談室設置について
4	平成16年7月3日	①健康手帳について ②学生寮規程について ③夏期休暇中の自主研修及び海外渡航について ④学友会幹事会報告について ⑤学生健康保険組合理事会の報告について
5	平成16年9月2日	①学生寮規程について ・寮規程について ・新寮の引越終了について ②相談ルームの実施報告について ③自主研修及び海外渡航について
6	平成16年10月7日	①学生寮について ・規程について ・防災訓練について ・自治会後期役員について ・臨時宿泊室使用規程について ・薬師祭パンフレットにおける寮紹介について ②学生サポートチームの現状について ③進路プロジェクトチームについて
7	平成16年11月4日	①学生寮について ・寮規程について ・防災訓練について ②進路プロジェクトチームについて ③駐輪場について ④学生の健康管理について
8	平成16年12月2日	①学生寮について ・寮規程について ・防災訓練に実施報告について ②進路プロジェクトチームについて ③冬季休業中の事故防止等について
9	平成17年1月6日	①健康手帳の配布について ②進路プロジェクトチームの検討結果について
10	平成17年2月10日	①新入生オリエンテーションについて ・学園生活を快適に過ごすためにpart I(寮オリエンテーション:防災訓練を含む) ・学園生活を快適に過ごすためにpart II ②新3年生の健康診断について ③進路ガイダンスの実施について
11	平成17年3月4日	①平成17年度入寮運用方針及び防災訓練について ②学生サポートチームの経過報告について ③進路ガイダンス(1・2年生向け)について

FD・評価実施委員会

委員長 野口美和子

I. はじめに

FD・評価実施委員会の所管事項は、学部の教育内容等の改善のための組織的な研修、および研究の実施に関することであり、活動方針は以下のとおりである。

1. 教育評価に関する事項

- (1) 学部カリキュラムの評価に関すること
- (2) 学生の到達度成績評価、教員の授業評価(学生および第三者による評価)に関すること
- (3) 教育方法教育環境の改善に関すること

2. 教員の資質開発に関する事項

- (1) 授業技法の改善の具体的検討に関すること
- (2) 教員研修会の企画、実施に関すること
- (3) 授業技法評価に関する教員セミナー等の計画に関すること

委員会構成員は、学部長(委員長)、一般基礎・専門基礎から1名、看護学領域4名の計6名である。

今年度の主要な行事としては、授業研究会を前期・後期の計2回開催し、委員会を4回開いて諸討議に当たった。

II. 委員会議事録

第1回(平成16年4月22日)

今年度の委員会活動の方針を討議し、前期と後期について各1回計2回の授業研究会を行うこと、学生による授業評価のまとめの公表を検討していくこととなった。平成15年度後期授業研究会での参加教員へのアンケート結果をふまえて本学部FDの今後の発展を検討すること、討議の中で全体の授業に関する問題として「レポート課題が多数重複していて負担が大きい」という学生の声をとりあげ、実態を調査して対策を立てていくこととした。

第2回(平成16年5月17日)

1) 授業評価の方法について

平成16年度後期授業研究会でアンケートを実施した結果、現在の授業評価でよいのかどうかという意見がだされ、このことについて検討した。

- ① 評価票の配布と収集法について

現在教員自身が評価票を配布し、回収しているが、学生が本音を書きにくいのではないかという問題点があげられ、検討した結果、収集を第三者が行ってもあまり意味をなさないことから、従来どおり教員が配布し、回収することが了承された。

② 集計方法について

現在評価票の集計は自己評価のために活用するという方針から教員が行っているが、正直に表示しているかどうかという問題点があげられ、検討した。第三者が集計する方法が理想であるとの意見がだされ、看護学務課で集計ができないかを検討したが、現体制ではシステム化もされていないことから無理であるため、アルバイトの雇用等を含めて検討することとなった。

③ 学生へのフィードバックの方法について

授業研究会報告書を1階の談話室（学生サロン）に2冊位において、学生が自由に閲覧できる方法をとることが了承された。

④ 学生による教員の授業評価票の項目について

学生に負担がない程度に項目を追加してもよいのではないかとの意見があり、次の点について項目の追加、および見直しをすることが了承された。

《改善項目》

・「講義（演習）の重要点が理解できた」を「重要点が理解できた」に改める。

《追加項目》

- ・「話し方は適切でしたか」
- ・「シラバスは充実していましたか」

2) FD・評価実施委員会の活動について

① レポート課題の出題について

竹田副委員長からレポート出題状況の調査結果について報告がなされた。重複数が多い時で10件にもなり、各教員の自由に任せておいてよいのかという問題について検討した結果、学生には、(A) 課題レポート、(B) 評価レポート、(C) 事前学習レポートの3つを区分して提示することが了承された。

② 授業研究会に関する件について

各科目の発表と質疑応答の時間について5分間延長して20分とすること、および総合討論をグループディスカッションとすることが了承された。

③ 実習評価について

実習指導に関する教員評価については、今後の検討課題とすることとなった。

第3回（平成16年10月7日）

1) 自己点検評価・中間報告について

自己点検評価の課題進捗状況報告について検討を行い、了承された。

① 授業評価活用の現状

学生による教員の授業評価票の集計は、後学期については研究費によるアルバイト雇用により事務局で行い、来年度以降は経費として要求することとなった。

② 授業評価結果の学生への公表

後学期から授業研究会の資料を学生サロンにおいて公開することとし、掲示するとともに来年度以降は学年当初の学部長ガイダンスで説明していくこととした。学生へ公開する資料は、「表紙／FDの目的と学生評価の目的／授業評価の結果」とした。

③ 授業研究会の報告

授業研究会のグループワークでは、「看護学実習における評価について」をとりあげた。これをどのように記載するかは、篠澤自己点検評価実施委員と相談のうえ決定することとした。

2) その他

学生の授業評価を活用して教員がどのように自己点検をしているのか、その内容の分析を水戸教授、松田教授、および竹田教授が行うこととなった。今後、授業評価を客観化して活用を広げていくこととなった。

第4回（平成17年3月10日）

1) 授業研究会について

授業研究会の準備状況を報告し、確認した。

- ① 発表者の発表資料準備について
- ② プログラム
- ③ 授業改善の結果報告について

2) 学生による授業評価の集計について

① 授業評価票の教員からの提出状況について

授業評価票の教員からの提出状況と集計の方法が看護学務課から報告された。

学生の自由記載内容を項目評価の結果と関連づけて調べる場合に備えて、集計後の評価票を教員に戻すかどうかを検討した。その結果、集計表（エクセル）の項目評価結果の入力欄と同一の行に自由記載内容を入力する方式とし、次回から実

施することとなった。

3) 平成17年度の授業研究会

例年どおり、前期・後期の2回行うことが了承された。

紀要年報編集委員会

委員長 渡邊亮一

紀要年報編集委員会の所管事項は、自治医科大学看護学部紀要、自治医科大学看護学部年報を編集・発行することである。

平成16年度の紀要年報編集委員会は、前年度から継続の5名の委員で構成し、これに看護総務課の松本則子主事を加えた6名で計2回の委員会を開催した。

第1回(平成16年5月24日)の委員会では、まず年報第2号および紀要第3巻の編集作業予定を決定した。次いで、年報第2号の内容を検討し、委員会等報告に保健委員会の報告を追加することを決定した。また、特別報告としては3件の候補を選定し、委員長が執筆候補者に打診することを決定した。なお、編集方針は前年度の編集方針を踏襲することとし、また執筆要領は前年度の執筆要領に最小限の修正を加えて執筆を依頼することを決定した。紀要第3巻の編集方針、投稿規程は、審議の結果、前年度のものをそのまま使用することに決定した。

第2回(平成17年2月3日)の委員会では、年報第2号の編集作業状況と紀要第3巻の投稿状況の報告が行われた後、投稿予定の原稿を含めて、投稿原稿の査読担当者を審議し、決定した。

上述の委員会の審議を経て、「自治医科大学看護学部年報」第2号を平成17年3月25日に発行した。第2号の体裁はA4判2段組で、総ページ数は64ページであった。また、内容は、2編の特別報告、委員会等報告、教育研究分野別報告、研究業績録、資料であった。

「自治医科大学看護学部紀要」第3巻は平成17年10月31日に発行した。第3巻の体裁はA4判2段組で、総ページ数は142ページであった。また、内容は、原著4編、報告6編の計10編であった。

なお、平成16年度に発行した年報第2号および紀要第3巻は、学内の教職員に配布するとともに、国立国会図書館をはじめ、全国の看護系大学、看

護系短期大学などに送付した。

予算委員会

委員長 野口美和子

所管事項は学部の教育・研究にかかる予算に関するもので、教授会構成員は4名(学部長、常置委員会委員長)である。

第1回(平成16年4月15日)

(1) 平成16年度看護学部教育研究経費等の予算額について、次のとおり説明がなされた。

1) 看護総務課所掌予算について

①個人研究費及び研究旅費は、教員の職位別人頭分の予算となっている。

②共同研究費は前年同額である。

③海外出張旅費は前年同額である。

④消耗品費は新規計上分を含め900千円である。

⑤旅費交通費は123千円で要望したところ、前年同額の100千円であった。

⑥印刷製本費は、短大記念誌を含め1,700千円で要望したところ、前年同額の1,000千円であった。(平成15年度は短大年報500部、学部年報・紀要各600部作成)

⑦役務費、支払手数料及び雑費は前年同額である。

⑧賃借料は前年度実績による予算額になっている。

⑨経常事務の負担金は5%削減の900千円である。

⑩北棟3階空調設備更新工事について、21,500千円で要望したところ10,000千円であったため、関係各課と調整をすすめているところである。(平成16年10月26日に更新工事が完了した。)

2) 看護学務課所掌予算について

①実習計画策定調査の旅費は前年同額である。

②講義実習用消耗品費は8,000千円、機器備品費は6,500千円で、前年比2,750千円の増の内示であった。

③今年度新たに、学生募集のための看護学部案内ビデオ作成として2,000千円が予算化され、現在準備を進めているところである。

④学生寮事業として、新寮の消耗備品(ベッド・机等)費用が17,000千円、新寮への引越

し費用が5,000千円の内示であった。

(2) その他

- 1) 看護学部個人研究費については、現在個々の配当額を各人がそれぞれに執行しているが、限られた研究費の有効活用に資するため、看護系については、領域毎にとりまとめて管理運用することとしたい。そのため、平成17年度を試行期間とし、平成18年度実施に向けて今後関係部課との調整、他大学等の実態調査を行い、検討していくこととなった。
- 2) 今年度は教員研修会・研究セミナー講師招聘について、教務委員会、大学院カリキュラム作成部会、FD・評価実施委員会等において検討することとなったが、それぞれの委員会からの推薦はなかった。
- 3) 共同研究費、講義実習消耗費及び機器備品費の配分については、教務委員会で話し合うこととし、配分額を決定した。
- 4) 学生の実習旅費は基本的には自己負担となるが、学生から実習病院の場所により交通費に格差が生じることの不満が一部でているため来年度以降の検討課題とすることとした。

第2回 (平成16年6月22日)

1) 海外出張について

「自治医科大学教員の海外出張に関する取扱規程」に基づき申請のあった3件について海外出張旅費支出について審議した結果、「学会発表」を目的とした1名の海外出張に係る旅費支出を承認し、それぞれの出張中の職務代行者を承諾した。

また、旅費額が100,000円未満である出張については、本学の旅費規程により計算した額の範囲内の額を支給するものとし、海外旅行許可申請書に海外出張所要経費(交通費・滞在費)を記入し提出することを了承した。

第3回 (平成16年9月2日)

1) 海外出張について

「自治医科大学教員の海外出張に関する取扱規程」に基づき、大学院開設と僻地看護学の研究の推進という看護学部の課題を考慮して、審議の結果、「大学院教育、僻地看護、性差医療に係る調査及び視察」を目的とした海外出張に係る1名分の旅費支出を承認した。

国家試験対策委員会

委員長 篠澤侘子

国家試験対策委員会は、平成16年9月30日の教授会において、構成員7名にて設置された。第1回国家試験対策委員会(以下、委員会という)で、学生が主体的に国家試験に合格できる能力を身につけられるよう方策を検討し、学生をサポートする。もって、保健師・看護師・助産師の国家試験受験資格のある学生全員の合格を目指すことを基本に取り組んでいくことを確認した。委員会において以下の審議を行った。

第1回 (平成16年10月22日)

国家試験対策委員会の基本的な取り組み方針、学生指導のあり方・指導方法、環境整備、国家試験事務手続き、役割

第2回 (平成16年12月1日)

3年生に対する国家試験についてのオリエンテーション内容、国家試験問題集の選定

第3回 (平成17年1月27日)

オリエンテーションの評価、12月中旬から1月にかけて実施した学生指導状況報告と支援内容の検討、模擬試験日程・実施方法の検討

第4回 (平成17年3月8日)

模擬試験実施状況報告、模擬試験終了後の学生支援のあり方、4年生に対するオリエンテーション内容の検討

学生支援などの委員会活動としては、平成16年12月9日に3年生に対する国家試験オリエンテーションを実施し、国家試験の概要、学習方法、模擬試験スケジュール、学生相談体制、国家試験問題集等参考図書の紹介などを行った。

平成16年12月から平成17年1月にかけて、国家試験対策委員による個別面接、学習相談を実施し、平成17年3月7日には看護師国家試験模擬試験を実施した。模擬試験の受験状況は、88名の受験申し込みに対して、学内受験予定者53名、自宅受験予定者34名(未提出9名)中計78名が受験した。この結果を踏まえて学生の学習相談を実施した。

カリキュラム検討委員会

委員長 水戸美津子

カリキュラム検討委員会は、平成16年9月30日の教授会において現行カリキュラムを点検評価し、新カリキュラムの検討を推進するために設置された。水戸を委員長とし、永井教授（副委員長）、高村教授、竹田教授、松田教授、川口教授、春山助教授、水野助教授、大原講師の計9名で構成された。このほかに中田看護学務課長、安島看護学務係長を加えた11名で、計5回の委員会を開催した。各回の委員会の審議概要は、表1のとおりである。

なお、第1回委員会の討議に先立ち、学部長より「学部開設時において、大学設置審査で問われたところは、独自の教育、大学の特色を活かした教育をしていただきたいとのことであった。短大から改組転換ということもあり、短大の基本を変えずに内容を加えた形で科目の新設等を行い、保助看の基礎教育を連動させていくということを第一に考えて開設まで至った経緯がある。今後は、自治医科大学看護学部は何を目指すのか、その独自性を考え、既成概念にとらわれることなく、領域を超えて考えていただきたい。さらに、学部全体の教員の意識も高めながらカリキュラムの見直し検討を行っていただきたい。」という話があり、委員会での検討の際に考慮することとして以下の8点が示された。

- ① 看護職に共通する基礎教育－看護の統合教育としてカリキュラムを充実すること。
- ② 看護学部の教育目標の見直し、教養教育や卒業研究の位置づけを検討すること。
- ③ 看護実践能力・育成の充実に向けた大学卒業時の到達目標を活用し、看護大学の教育水準を保つと同時に自治医科大学の理念に基づき強化するところを明確にすること。
- ④ 単位履修制を中心として、学年進級制との併用について検討すること。
- ⑤ 社会人入学を検討（特に学士入学）すること。
- ⑥ 看護学の学習の効率化を図ること。
- ⑦ 現代的教育ニーズ取組支援プログラム（略称：現代GP）の獲得を目指すこと。
- ⑧ 助産科目の選択性について検討すること。

表1 カリキュラム検討委員会の審議概要

回	日時	審議概要
1	平成16年11月14日	学部長より、資料に基づいてカリキュラム検討の方向性が示された。平成17年秋頃を目途に現在のカリキュラムの見直しを行い、平成18年6月頃を目途に新カリキュラムの作成を行い、平成19年度入学生から適用予定で検討することを確認し、会議日程等を決定した。さらに、平成17年7・8月を目途に、学生へのカリキュラムに関するアンケート調査の実施と教員懇談会開催を決定した。
2	平成16年12月6日	自治医科大学学則第1条の目的及び使命に基づき、看護学部の教育理念及び教育目標について審議した。様々な意見が出されたが、結論は出さずに今後のカリキュラム評価・改正の過程で継続審議することにした。学生によるカリキュラム評価アンケート調査および教員懇談会の進行について役割分担した。
3	平成17年1月27日	現行カリキュラムの問題点及び改善の方向性について審議した。現行カリキュラムの主要な問題点として、(1)4年間の統合されたカリキュラムとはいえない、(2)学生の段階的学習過程とカリキュラム進度の整合性に欠ける、(3)科目間で内容の重複が多い、(4)必要かどうかの検討を要する科目がある、(5)一般教育科目の位置づけの検討が必要であることなどがあげられた。今後の検討課題として、(1)カリキュラムの順序性、(2)臨地実習の位置づけ・順序性、(3)選択授業の考え方、(4)ボランティアや夏期体験学習のカリキュラム組み入れへの検討、(5)一般教育の位置づけの検討、(6)セメスター制の検討、(7)その他関連事項として編入生、科目等履修生、学士入学生を視野に入れたカリキュラムの検討の必要性があげられた。
4	平成17年2月24日	看護学実習について検討した。主に(1)実習にあたっては、健康レベル別、看護実践の場別、発達段階別を考慮すること、(2)1・2年次に健康な生活の理解（小児、成人、老年、母性）と看護過程の理解が必要であること、(3)必修実習と選択実習の必要性について確認された。セミナーは少人数制で各教員の専門性を生かしたものを、学生の主体性をのばすものが必要であることが確認された。
5	平成17年3月24日	第4回の会議からの継続審議で、新カリキュラムにおける実習について審議した。(1)発達段階と各専門領域実習、健康レベルと各専門領域実習、看護実践の場と各専門領域実習の関係、(2)学年進行と段階的進行に伴う実習の位置づけについて検討した。

臨床指導者研修会

担当 成田 伸

看護学部では、平成15年度から看護学部の臨床実習先の臨床スタッフ向けの研修会として「臨床指導者研修会」の看護学部単独での開催を開始した。研修会は1日4時限5日間で開催することとし、カリキュラムは、「看護学部の教育理念」、「看護学部のカリキュラムの概要」、「臨床実習指導論」、「看護教育学」、「臨床実習における人間関係論」、「看護過程」、「看護事例検討」であり、講師は主に学部長と看護系教授が分担して担当することになった。カリキュラムは、看護短期大学時代の旧プログラムの未修了者がいることを考慮して、内容的な継続性を考慮しながら組み直しを行っている。

平成16年度も同様のカリキュラムであったが、夏季集中と後学期土曜日5週間の2期開催であった。研修会修了者は、附属病院関係が39名、上都賀総合病院、小山市民病院、済生会宇都宮病院等の実習病院関係が11名の合計50名であった。旧プログラムからの継続者はごく少数であり、年間を通じて5日間のカリキュラムを修了した受講生がほとんどを占めていた。受講生からは、好評を博し、研修会終了後には、看護学部長から修了証書が授与された。

臨床指導者研修会担当は、看護学部長直属で、教授1名に講師・助手4名で構成され、受講生募集、受講の管理、研修会の準備・実施・片づけを行ったが、研修会資料準備や当日の作業は、看護系の全領域の教員の協力を得て行った。しかし、5日間というカリキュラムは、特に夏季集中であったり、5週間連続土曜日開催であったりというスケジュールが教員にとって負担が大きく、効果を考えながらの期間の短縮などの対応が必要である。

教育研究分野別報告

学 部 長

教授 野口美和子

(1) スタッフの紹介

教授 野口美和子

(3) 研究の概要

介護保険施設における痴呆症をもつ入所者に関するリスクマネジメントの導入と理論化(平成14～17年度 文部科学省科学研究費補助金基盤研究(B) 研究代表者 野口美和子)をテーマに、共同研究者(千葉大学看護学部、岐阜県立看護大学、石川県立看護大学、埼玉県立大学保健医療福祉学部)の協力を得て、施設のリスクマネジメントに関する実態研究を中間報告としてまとめた。引き続き、介護保険施設において痴呆症(現在は認知症)をもつ入所者に関するリスクマネジメントの導入を行い、その経過を記録し、理論化に向けて研究を推進している。

一般基礎

教授 高村寿子

(1) スタッフの紹介

教授 高村寿子

教授 渡邊亮一

講師 余語琢磨

(2) 教育の概要

1) 教育と人間

高村は、2学年前学期の選択科目「教育と人間」(30時間1単位)を担当した。科目分担者は青柳宏非常勤講師(宇都宮大学助教授)で、18時間を担当した。前年度の授業評価の結果を踏まえて、前半はケアの視点からの教育とは何かを補強するとともに、後半は教育の対象者別方法論としての理論とスキル、なかでも成人学習理論(アンドラゴジー)を強化した。

2) 人間関係論

高村は、同じく2学年前学期の選択科目「人間関係論」(30時間1単位)を担当した。科目分担者は大島知佐子非常勤講師で、14時間を担当した。前年度の授業評価の結果を踏まえて、科目分担者との教育目的・目標の確認および再調整を図り、

前半は生き生きとした人間関係の必要性の理解と、そのためのスキルトレーニングへのモチベーションを高め、後半は構成的グループエンカウンターを活用した。

3) 健康論

高村は、2学年前学期の選択科目「健康論」(30時間1単位)を担当した。科目分担者は、篠史美非常勤講師(山田リズム体操クラブ)で、10時間を担当した。前年の授業評価の結果を踏まえ、前半は青年期から健康を維持・増進していくことと、その方法を身につけることの重要性を強調した。後半の運動実践では、ダンスムーブメントを中心に、身体を動かす喜び・楽しみを体験させた。

4) ジェンダー論

高村は、3学年後学期の選択科目「ジェンダー論」(30時間1単位)を担当した。科目分担者は原ひろ子非常勤講師(お茶の水女子大学名誉教授、現放送大学教授)で、16時間を担当した。前半は、ジェンダーとは、ジェンダーの視点に立つこととは、ジェンダー統計、ジェンダーと健康・医療、ジェンダーと看護・介護、ジェンダーと患者・家族・来談者そして情報についてなどを教授した。後半は、セクシュアリティとジェンダー、基本的人権の視点からジェンダー(リプロダクティブヘルス)を考える、ライフステージとジェンダーについてなどを教授した。

5) 保健医療情報学

渡邊は、1学年後学期に「保健医療情報学」の講義ならびに演習を行った。「保健医療情報学」は、30時間の選択科目で、看護における情報学の必要性を理解し、基礎的な情報処理能力を養うことを目的としている。情報とは何か、看護と情報処理、コンピュータとは、コンピュータのハードウェアとソフトウェアなどについて講義した後、コンピュータの基本的な操作法、インターネットによる情報検索、Wordによる文書作成、Excelによる表やグラフの作成などの演習を行った。

6) 保健医療情報学演習

渡邊は、2学年前学期に「保健医療情報学演習」の講義ならびに演習を行った。「保健医療情報学演習」は、60時間の必修科目で、統計的な知識を身につけ、それを実際の医療や看護の場面で応用できる能力を養うことを目的としている。尺度と度数分布、代表値と散布度、相関と回帰、確率・順列・組み合わせ、確率分布、仮説検定、分散分

析法、推定などの基礎的な統計理論および保健統計について講義し、統計解析パッケージ「Halwin」を使って実際のデータを解析する演習を行った。

7) 情報収集と表現法

渡邊と余語は、野山広非常勤講師（国立国語研究所）とともに、1学年前学期に「情報収集と表現法」の講義ならびに演習を行った。「情報収集と表現法」は、30時間の選択科目で、効果的な情報収集・思考・表現を行うための基礎的な方法を学習することを目的としている。余語は12時間を担当し、情報という概念、コミュニケーションと言語、文字情報の収集と問題発見の技術、論理的な分析と思考の方法をテーマとして、講義ならびに演習を行った。野山講師は12時間を担当し、言語・非言語コミュニケーションの実際、論理的・演劇的知による対話と論議の実践をテーマとして講義を行った。渡邊は14時間を担当し、プレゼンテーションを助ける技術についての講義および演習を行った。なお、最終回には、学生に実際に課題を与えてグループごとにプレゼンテーションを行わせた。

8) 歴史と人間

余語は、1学年前学期の選択科目として、地域に暮らす人々の生活・意識の特性と変容を歴史的視点から理解することを目的に、24時間の「歴史と人間」の講義を行った。テーマは、祈りと心性、暮らしと食、環境と技術、病いと健康、近世の都市生活と衛生で、視覚教材の多用や近隣の有機栽培農家・史跡・河川改修跡等への校外学習により、事象へのリアリティと関心の深まりを企図した。受講者は90名であった。

9) 生活と社会

余語は、1学年前学期の必修科目として、個人と社会の結びつきを生活者の視点から考察する「生活と社会」の講義のうち、開講時の2時間を担当した。人文・社会科学における人間像の現状を概説するとともに、関連諸科目のオリエンテーションを兼ねた。

10) 地域の生活と健康

余語は、1学年前学期の選択科目として、地域生活と健康との関連の理解を目的とする「地域の生活と健康」の講義のうち、4時間を担当した。内容は、生育環境別にグループ化した学生の健康観や、介護者の語りにもみる介護観を、学生自らが抽出する作業のなかで、地域文化の特性と要因を

考えるものであった。

11) 文化人類学入門

余語は、3学年後学期の選択科目として、人間の思考と行動に大きな影響を与える文化の問題を理解することを目的に、30時間の「文化人類学入門」の講義を行った。テーマは、家族・親族、地域共同体、性と生殖、身体、病いと治療、老いと死などで、学生の課題発表を含むライフコースと文化に関連するさまざまな事例をもとに、他者理解の方法を探った。受講生は17名であった。

12) 現代保健・看護セミナー

高村、渡邊、余語は、1年生前学期の選択科目である「現代保健・看護セミナー（30時間1単位）」を、それぞれ中村美鈴講師、里光やよい講師、塚越フミエ教授と組んで担当した。「保健・看護セミナー」は、身近な生活や体験のなかから、保健および看護につながる問題を見出し、現代の保健および看護が直面する課題に関連づける方法を学習することを目的としている。

13) その他

高村は、非常勤講師として、埼玉県立大学短期大学部助産学専攻科の「健康教育学」を30時間、国際医療福祉大学保健学部看護学科の「健康教育学」を28時間担当した。

渡邊は、非常勤講師として、女子栄養大学栄養学部保健栄養学科の「情報科学演習」の講義を28時間、社団法人南埼玉郡市医師会久喜看護専門学校「看護学概論Ⅲ（看護研究）」の講義および演習を26時間担当した。

余語は、兼任講師として、自治医科大学医学部で「文化人類学入門」および「医療人類学」の講義をそれぞれ20時間、また非常勤講師として、放送大学の「文化人類学」の講義を8時間、早稲田大学教育学部の「人類学」の講義を26時間、早稲田大学人間科学部の「生態人類学」の講義を26時間担当した。

(3) 研究の概要

1) 性に関する思春期保健教育のためのマニュアルの開発と教材作成に関する研究

高村は、厚生労働科学研究（子ども家庭総合研究事業）で、平成16年度から1年間にわたって「性に関する思春期保健教育のためのマニュアルの開発と教材作成に関する研究」班の主任研究員として研究を行った。その成果として、ピアカウ

ンセラー養成およびピアカウンセラー養成者養成における教材(副読本, ビデオ, 各種教材)と養護教諭向け男子思春期保健指導マニュアルを作成した。

2) 保健・医療・福祉の連携推進システム構築の方法論と評価手法の開発に関する研究

渡邊は, 日本病院管理学会から研究費の助成を受けて(研究代表者 信川益明助教授(杏林大学医学部総合医療学)), 他施設の18名の研究者らと「保健・医療・福祉の連携推進システム構築の方法論と評価手法の開発に関する研究」を行った。

3) 日本・東南アジアにおける歴史学的研究

余語は, 2003年度より3カ年計画で交付された科学研究費補助金基盤研究(B)のテーマ「国民国家において考古学が果たした本質主義的役割の批判的検証」に基づき, 研究会議の開催, 資料の収集と分析, 西南諸島・インドネシアにおける調査および現地研究者との情報交換を実施した。

4) 地域介護に関する研究

余語と共同研究者は, 地域社会における情報フローと介護者の意思決定に関する医療人類学的・社会心理学的な調査を2000年度から継続している。今年度は, 数次の研究会議を開き, 2006年度に予定されている成果出版に向けて分析を進めた。

5) 古代・中世の技術文化に関する研究

余語は, 1998年より継続してきた日本窯業生産およびその技術に関する実験考古学的・理化学的な分析を集大成し, 学会誌および関連研究者を網羅的に組織した研究会において発表した。その成果は, さらに継続研究の結果を加えて, 2006年度に公刊される予定である。

(4) その他

1) 高村は, 昨年に引き続き, 社団法人日本看護協会看護教育・研究センターで, 看護職のパワーアップシリーズ「キャリアプランと生涯学習」研修会をコーディネートし, 講師を務めた。

2) 高村は, 財団法人地域振興財団の現地研修会制度を活用し, 沖縄県石垣市で思春期ピアカウンセラー養成講座「フォローアップ講座」を開催した。その波及効果で同県石垣市および与那国町で, 「世代を越えて支えあう性と生」研修会をコーディネートし, 講師を務めた。さらに, 昨年休止していた中央研修会「第7回健康教育・ヘルスプロモーション研修会」を復活させ, コーディネート

するとともに, 講師を務めた。

3) 高村は, 各県や各県の看護協会で, 思春期ピアカウンセリング事業やセルフエフィカシー介入による新健康教育プログラムに関する講演を行った。

4) 高村は, 日本思春期学会理事および研修・編集委員, 日本更年期学会評議員, 日本健康教育学会評議員, 関東甲信越性教育研究連絡協議会理事, 全国性教育研究連絡協議会理事, とちぎ思春期研究会会長などを務めた。

5) 高村は, 第63回日本公衆衛生学会, 第23回日本思春期学会大会, 第13回日本健康教育学会において座長を務めた。

6) 渡邊は, 平成15年度に引き続いて, 財団法人日本医療機能評価機構の一般病院B部会員ならびに評価調査者として, 第三者病院機能評価事業に関与した。

7) 渡邊は, 日本医療福祉設備学会理事ならびに事業委員会委員, 日本医療情報学会評議員, 日本診療録管理学会評議員, 日本病院管理学会評議員などを務めた。

8) 余語は, 日本生活学会の査読委員として学会誌の編集に携わった。早稲田大学文化人類学会編集委員を努め, 会誌の編集およびシンポジウムの企画・運営に携わった。

専門基礎

教授 竹田俊明

(1) スタッフの紹介

教授 竹田俊明

教授 竹田津文俊

(2) 教育の概要

専門基礎分野は, 看護の対象である人間の理解および看護実践の基礎となり看護学学習の基盤となる科目から構成されている。

1) 竹田は, 1学年に対して「人体の構造と機能Ⅰ」, 「人体の構造と機能Ⅱ」の授業を行った。これらは, 本学カリキュラムで人間の理解のうちの身体システムに位置づけられ, 看護師学校養成所指定規則のなかの「人体の構造と機能」に関する内容を教授している。科目の目標は, 人体の構造,

解剖学的構成を学習するとともに、正常な身体機能を営む諸原理を理解することであり、人体機能に関する諸概念を修得することである。「人体の構造と機能Ⅰ（前学期）」は90時間で、循環、呼吸、血液、消化、腎・尿排泄、体液浸透圧と体液pHの調節、内分泌、生殖の機能、ホメオスタシスをカバーし、「人体の構造と機能Ⅱ（後学期）」は45時間で、神経、感覚、筋骨格・運動系をカバーした。個別の機能概念を積み上げていくばかりでなく、統合的理解、応用ができることを目指した。解剖学オリエンテッドな内容についてはオムニバス形式をとり、自治医科大学医学部解剖学講座の大河原重雄教授、竹内公一講師が計24時間（人体の構造と機能Ⅰ）、および10時間（人体の構造と機能Ⅱ）教授した。

講義形式を主体としたが、一部実習、演習を取り入れた。血液、呼吸、体液、神経・筋の興奮性に関して実験を含む体験学習を、また人体解剖実習として見学による学習を実施した。

2) 竹田津は、「疾病と病態Ⅰ」を担当した。「疾病と病態Ⅰ」の目標は、看護に必要な疾病の発症機序とその治療法の理解である。実地臨床に即した内容を核とし、看護場面において遭遇する種々の患者の病態理解を第一の目的として講義を行った。

2004年度後学期に、2004年度入学の1年生に対し、まず症状・症候論を中心に、身体観察、検査、診断にいたる過程を総論的に理解する臨床医療総論ともいべき講義を実施した。次に、疾病と病態の各論にあたる部分では、血液系、循環器系、内分泌系、免疫系、代謝系、消化器系、呼吸器系、腎泌尿器系、脳神経系および電解質の異常の病態生理と治療を中心に講義を行った。

講義時間は、各系2～4時間ずつで、合計68時間となった。

3) 竹田津は、2004年度前学期に、2003年度入学の2年生に対し、「医療機器論」1単位15時間の授業（選択、選択者40名）を行った。看護の場で用いられる医療機器の構造と操作の基本を理解することを目的とした。本学部の竹田津、竹田、医学部の松浦克彦講師、安隆則講師、RIセンターの菊地透氏、附属病院の臨床工学部高橋俊郎技士長（鈴木孝雄技士）が分担した。

4) 竹田津は、2002年度入学の3年生に対し、後学期に「英語Ⅱ」の講義を15時間行った。医療で

よく用いられる用語のしくみを理解するため、ラテン語、ギリシャ語由来の接頭辞、語幹、接尾辞を考慮した語源学を教授した。さらに、英語、およびフランス語による医療場面での会話、医学論文の読み方についても取り上げた。

5) 1学年に対する「現代保健・看護セミナー（30時間）」では、それぞれ9名の学生を担当し、指導した。学生の自主性、自発性を重んじるなかで、学生自身の保健・看護問題への気づき、調査、学習、討議、体験など、様々な活動をスムーズに進められるよう助言、支援した。

6) 専門基礎諸科目

この分野の科目および関連の深い科目として、「物理学」、「化学」、「生物学」、「生化学」、「薬理学」、「疾病と病理」（1学年、前学期・後学期の別は省略）があるが、さらに今年は「運動生理学」、「疾病と病態Ⅱ」、「栄養学」、「免疫学」、「微生物と感染」（2学年、前学期・後学期の別は省略）、「医療論」（3学年）が開講された。これらの科目については、医学部教員（兼任）や附属病院のスタッフ、学外からの非常勤講師の方々が科目責任教員としての役割を果たされた。

「物理学」は宇都宮大学工学部電気電子工学科三石孟助教授、「化学」は石倉久之自治医科大学名誉教授、「生物学」は長野敬自治医科大学名誉教授、「生化学」は医学部生化学講座の濱本敏郎教授、「薬理学」は医学情報学の岸浩一郎助教授、「疾病と病理」は医学部病理学講座の斎藤建教授が担当され、「運動生理学」は医学部総合教育の板井美浩助教授、「疾病と病態Ⅱ」は医学部外科学講座の永井秀雄教授、「栄養学」は附属病院栄養室の宮本佳代子室長、「免疫学」および「微生物と感染」は医学部感染・免疫学講座の平井義一教授が中心となって担当された。「医療論」は狩野庄吾自治医科大学名誉教授が担当された。科目によっては、授業の一部を医学部の該当講座所属教員が分担教授した。

体験学習として、「生化学」では血清タンパクに関する学生実験、「微生物と感染」および「免疫学」では細菌学的、血清学的な学生実験、「薬理学」では薬剤データベースを用いた演習が実施された。

7) 竹田は、自治医科大学看護短期大学専攻科（助産学専攻）において「生殖の構造と機能Ⅰ」の講義を8時間担当した。

8) 竹田は、茨城県結城看護専門学校において非常勤講師として「解剖生理学」の講義を45時間担当した。

(3) 研究の概要

1) 竹田は、ニューラルネットワークの作用と応用についての研究を行っている。

2) 竹田津は、「医療事故におけるインシデントやミスの意味」と「末期疾患患者における延命措置意思決定」の研究を行っている。

(4) その他

1) 竹田は、日本生理学会の評議員および茨城県看護教育財団結城看護専門学校の評議員を務めている。

基礎看護学

教授 松田たみ子

(1) スタッフの紹介

教授 松田たみ子
 講師 里光やよい
 講師 大久保祐子
 助手 亀田真美
 助手 角田(菅野)こずえ
 助手 川上 勝 (2004年4月1日就任)

学歴：1996年北里大学看護学部卒業，2002年北里大学大学院看護学研究科看護学専攻修士課程修了(修士(看護学))。職歴：1996年北里大学病院(2000年まで)，2002年医療法人社団景翠会介護老人保健施設こもれび(2004年まで)。所属学会：日本看護学教育学会，日本看護研究学会，日本睡眠学会。

(2) 教育の概要

1) 看護学原論

「看護学原論」は，1年次前学期に開講される3単位45時間の必修科目である。学習目的は，看護を理解するための共通基盤である看護の概念・目的について，歴史的背景を踏まえて理解し，看護実践の基盤となる人間観・生活観・健康観を養うとともに，看護をとりまく諸事情に関する現実的課題を見据えて将来を展望する能力を養うことである。松田が37時間の講義を担当し，保健医療福

祉チームの理解については，病院内の7部門の協力をいただき，8時間分を講義と見学とした。

2) 基礎看護学Ⅰ

「基礎看護学Ⅰ」は，1年次前学期に開講される2単位60時間の必修科目である。学習目的は，看護実践の理論的根拠と問題解決過程を理解し，あらゆる看護実践の共通基盤となる看護技術を学習することである。松田が30時間，里光が10時間，大久保が20時間の講義を担当した。なお，演習については基礎看護学領域全教員で担当した。

3) 基礎看護学Ⅱ

「基礎看護学Ⅱ」は，1年次後学期に開講される2単位60時間の必修科目である。学習目的は，日常生活行動に関連する援助としての看護実践に必要な理論と基本的看護技術について学習することである。環境，ボディメカニクス，清潔，食，排泄(自然排泄への援助)などについて，講義と演習を行った。また，看護実践の思考過程も看護技術の学習のなかにも意識づけることをねらって，基礎看護学のまとめとして，事例を用いて看護計画を立て実施・評価するという内容を取り入れた。

4) 基礎看護学Ⅲ

「基礎看護学Ⅲ」は，2年次前学期に開講される2単位60時間の必修科目である。学習目的は，診断治療に関連した生活の援助としての看護実践に必要な理論と技術について学習することである。感染予防，検査・薬物療法に伴う看護，排泄(導尿・浣腸の技術)，罨法・吸引・吸入，死および事例を活用した看護過程の理解などについて，講義・演習を行った。この科目では，看護基礎技術の科目のまとめとして，看護技術の自発的学習の喚起と，個別の修得状況の確認のために，個別のチェックを行った。

5) 基礎看護学実習Ⅰ

「基礎看護学実習Ⅰ」は，1年次に実施する実習である。11月8日から12日の1週間，1単位の实習を行った。実習の目的は，対象によい看護を提供するために，医療におけるコミュニケーションの機能を学ぶである。自治医科大学附属病院の成人系16病棟において，各病棟1名の担当教員配置で実施した。学生は，入院生活に関係する各部門の見学後，病棟において看護師のとる多様なコミュニケーションの場面に参加し，学習した。また，受け持ち患者とのコミュニケーションを通して，看護者としてのコミュニケーションの難しさを体

験しながらも、受け持ち患者の入院生活の状態、入院中の思いを理解することができた。

今年度は、前年度より1病棟多い16病棟での実習であったため、学生数6名のグループを多くすることができたことは、教育上有効であったと思われる。

6) 基礎看護学実習Ⅱ

「基礎看護学実習Ⅱ」は、2年次後学期に、受け持ち患者の看護の実施を通して学ぶ実習である。10月18日から29日までの2週間、2単位の实習を行った。実習の目的は生活援助技術の実践を学ぶことであり、これまで学習した知識を通して、健康障害による日常生活の変化から生じる対象のニーズを理解し、看護を実践するための基礎を学ぶとした。自治医科大学附属病院の成人系16病棟において各病棟1名の担当教員配置で実施した。

学生は、実際に患者の看護を行うことの難しさを感じつつも、個別の看護の実施の仕方を学ぶとともに、保健医療チームにおける自らの立場を自覚し、看護職の役割や患者への働きかけの意義について体験を通して学びを深めた。

7) 看護学概論

「看護学概論」は、1年次前学期に開講される1単位15時間の必修科目である。学習目的は、人々の健康における看護の働きについての概要を理解し、看護学を学ぶための基盤を養うことである。科目責任者を松田が担当し、基礎看護学領域4時間の講義を松田が、精神看護学領域2時間の講義を永井教授が、地域看護学領域2時間の講義を篠澤教授が、母性看護学領域2時間の講義を川崎教授が、小児看護学領域2時間の講義を川口教授が、成人看護学領域2時間の講義を塚越教授が、老年看護学領域2時間の講義を水戸教授が担当した。

8) 現代保健・看護セミナー

「現代保健・看護セミナー」は、1年次前学期に開講される1単位30時間の選択科目である。学習目的は、身近な生活や体験のなかから、保健および看護につながる問題を見いだす方法を学習することである。松田は、西岡助教授(精神看護学)、加藤講師(小児看護学)と12名の学生を担当した。里光は、渡邊教授(一般基礎)と9名の学生を担当した。大久保は、水戸教授(老年看護学)と9名の学生を担当した。学生個々の興味分野についての発表と質疑や身近な生活体験などから感じたことをテーマとし、探求を深めた。担当教員は、

各時間の内容が充実するよう準備をし、討議が実りあるものになるようサポートを心がけた。

9) 保健・看護研究セミナー

「保健・看護研究セミナー」は、3年次後学期に開講される1単位30時間の選択科目であり、保健・看護に関する研究のテーマの選び方、研究の進め方について学ぶことを目的としている。看護系の全教員が担当であり、基礎看護学では14名の学生を担当した。各学生が関心をもっているテーマの論文を読み、プレゼンテーションと全体討議を主な方法として、個々の学生の4年次の卒業研究で取り組む準備としての基礎になるような内容の学習となるよう努めた。

(3) 研究の概要

1) 看護学共同研究費で平成14年度より行っていた「SECIプロセスに基づく看護学技術演習の研究」は、当学部1期生99名を対象にした平成14年度の実施状況と平成15年度に収集したデータとをあわせて演習の成果を評価し、平成16年度で終了とした。

2) 平成16年度より、根拠に基づく看護の働きかけ、良い効果を生む看護技術の開発を目指して、「看護技術の生体情報に基づく方法的根拠と生体への影響の解明に関する研究」についての取り組みを開始している。

(4) その他

栃木県看護協会臨床指導者講習会において松田は看護論(6時間)、臨床実習の評価(3時間)を、里光は実習指導の原理(6時間)を、大久保は実習指導の評価(6時間)の講義を担当した。

松田は、第36回看護学会(看護教育)の準備委員会の委員長を(2004年6月~2006年6月)務めた。

大久保は、栃木県看護協会広報出版委員として活動し、第5回都道府県看護協会機関誌コンクール佳作入賞に貢献した。また、日本褥瘡学会関東甲信越地方会栃木県支部支部長として、平成17年2月12日に第1回支部講演会を開催した。さらに、放送大学大学院波多野誼余夫教授、清泉女子大学福田健助教授のもとで、認知科学・学習科学ゼミに参加し、学習プロセスにおける学生の認知の深化を促進する教員の働きかけの研究に取り組んだ。

里光は、福岡(9月25・26日)、東京(10月30・31日)、名古屋(11月20・21日)で開催された古

橋洋子看護記録セミナーにおける演習講師を務めた。

地域看護学

教授 篠澤侘子

(1) スタッフの紹介

教授 篠澤侘子

助教授 春山早苗

講師 岸恵美子

助手 鈴木久美子

助手 佐藤(田中)幸子

助手 舟迫 香(2004年10月1日就任)

学歴・資格：群馬県立医療短期大学看護学科卒業(看護師免許取得)，同短期大学専攻科地域看護学専攻修了(保健師免許取得)，看護学士。職歴：群馬県前橋市の病院にて病棟看護師として勤務。

(2) 教育の概要

1) 地域の生活と健康

「地域の生活と健康」は、1単位30時間で1年生を対象にした選択科目授業である。97名の学生が受講した。教員3名で篠澤8コマ、春山5コマ、余語が2コマを担当した。篠澤は、地域の人々の生活を理解し、健康との関連性について学ぶことを目的にした授業を展開した。自分の生活の振り返りや事例—高齢者夫婦の暮らしぶりなどから、自己の生活を身近にとらえることができるように考えさせた。また、地域の老人クラブとの交流会を企画し、高齢者の生活・健康状況、交友関係、趣味・仕事などの活動状況を聞き、レポートにまとめさせ、グループワークや発表から多様な生活や住民の価値観、保健行動について学ばせた。

春山は、学生が理解しやすいように、またイメージしやすいように具体的な事象を教材に用いて、自然や社会や文化などの環境や人々の慣習や地域社会が人々の健康にどのように影響しているかなどを絵、写真、図を用いて教授した。各講義のあとに関連した課題を出し、主体的に考えたり、学習につなげたりできるようにし、その課題から一つを選び、評価対象となるレポートを提出させ、生まれ育った地域や現在住んでいる地域に目を向けさせ、地域社会生活と健康との関連について考

えさせた。

余語は、現代日本において居住地域・環境と文化の相関関係のワークシートを用いて、学生自身に分析し発表させ、介護の語りを聞かせ、考えさせた。

2) 現代保健・看護セミナー

「現代保健・看護セミナー」は、1単位30時間で1年生を対象にした選択科目である。篠澤は9名の学生を担当した。学生は、授業や自分の生活などから興味・関心のあったテーマ「障害者スポーツ、高齢者介護」について文献を探索し、発表により学びを深めた。また、実際に学内で車椅子などを用いて視覚障害者や高齢者の模擬体験後に、病院の外來・売店、町内のスーパーでの買い物などの場面で、患者や住民が利用しやすいかなどを体験した。その結果は、院内の関係職員に報告した。さらに、障害者として調理実習を試みた。多くの方の協力を得て体験し、障害者が地域で生活するためには、さまざまな配慮が必要であることに気づき、看護職として、どのように考えていくかに結びつけることができたのではないかと思う。障害者の視点で考えていくことが重要であることを学んだ。春山、岸ともに9名の学生を担当し、それぞれに「現代保健・看護セミナー」を実施した。

3) 看護学概論

「看護学概論(健康と生活を守る看護の役割・機能Ⅱ)」は、1単位15時間の必修科目であるが、そのうちの1回90分を担当した。地域看護学は、地域で生活する様々な健康レベルにある個人から地域住民全体を対象にし、健康や生活の質向上に寄与する看護の実践の科学であることを教授した。また、地域看護の対象や看護活動、ヘルスケアシステムにおける看護の役割などについて、事例やパワーポイント、資料などを用いて授業をすすめた。

4) 保健・看護研究セミナー

「保健・看護研究セミナー」は、1単位30時間、3年生を対象にした選択科目で、篠澤、春山、岸が担当した。導入として、このセミナーの目的・目標などのシラバスの説明、看護研究の目的、特徴、研究問題や課題の発見・決定、倫理的配慮について講義した。次にセミナー形式で、学生が文献検索し購読した看護論文を、3教員がグループに分かれて各学生に発表させ、ディスカッション

することにより研究問題の発見と研究課題に結び付けるよう考えさせた。文献検索の目的・方法やレポート作成について、講義形式で学ばせた後、研究課題に関連する文献を5～10編選ばせ、研究テーマによって、それを探求する方法は異なることなどを理解できるよう所定の書式に基づいて記述させた。記述した文献をプレゼンテーションさせ、ディスカッションにより倫理的配慮、看護実践への適用、看護学が追求すべき多様な課題について学ばせ、現時点での研究課題に関連のある看護の論文を読んでまとめさせた。

5) 地域看護学概論

「地域看護学概論」は、2単位30時間、2年生を対象にした必修科目で、オムニバス形式により講義を実施した。篠澤が10時間を担当し、地域看護の歴史、公衆衛生看護活動の展開として、学校看護、産業看護、施策化と看護師の役割を、春山が12時間を担当し、地域看護学の概念、公衆衛生看護活動の展開として、地区活動の考え方、手段、ケアシステムなどを、岸が6時間を担当し、在宅看護活動の展開とケアシステムを講義した。そのうち春山の講義2時間を演習とし、学生を9グループに分け、セミナー形式で地域看護学教員全員により実施した。演習は、家庭訪問事例を用いて学生7～8名のグループを教員1名が担当した。家庭訪問事例は、疾病、生活、生きがい、家族の健康管理まで含んだケースへの支援から保健師の役割など、学生個々に理解した点を発表させながら学ばせることができた。全体に事例、資料、パワーポイントを作成し、ビデオなどを活用して、地域看護学概論を理解させた。

6) 地域看護活動論Ⅰ

「地域看護活動論Ⅰ」は、2単位30時間、3年生を対象にした必修科目である。全体を①地区活動、②在宅看護過程の展開、③保健指導論の3つに分け、講義に演習を加えて実施した。①講義を基に某自治体の地区既存資料から必要な情報を追加し、グループワークにより地区活動計画を作成させた。②在宅看護の典型的な模擬事例を基にこの事例の看護過程の展開について所定の記録用紙に記述させた。①②はグループで学習をすすめ、講義、演習を組み合わせ、教員の助言を得ることで、さらに学習を深めさせた。②の模擬事例から③慢性疾患患者への保健指導計画を各学生が立案し、立案した計画にあわせて、患者役、保健師役、観察

者役の3名1組でロールプレイを行った。保健師役として実施後に、患者役、観察者役からの助言をもらうことで、振り返りを行うようにさせた。

7) 地域看護活動論Ⅱ

「地域看護活動論Ⅱ」は、2単位30時間の必修科目である。地域に生活する各発達段階にある対象や各健康障害をもつ対象への地域看護活動別に、具体的には母子保健福祉活動、成人・高齢者保健福祉活動、感染症対策と保健福祉活動、難病対策と保健福祉活動、地域精神保健福祉活動の5つの学習課題別に2～4回の講義をオムニバス形式で行った。

8) フィールド実習

「フィールド実習」は、3単位135時間、3年生を対象にした必修科目である。107名の学生を自治医科大学周辺地域とへき地に分け、訪問看護ステーションにおける在宅看護活動、学校・産業における看護活動、外来・救急などにおける看護活動について、さまざまな健康レベルや生活の場における看護の役割特性と課題について学ばせた。実習施設として、自治医科大学周辺の施設は、訪問看護ステーション14カ所、学校6カ所、産業3カ所、自治医大大学病院外来施設、およびへき地施設は、群馬県にある西吾妻福祉病院・六合温泉医療センター、日光市民病院・奥日光診療所を拠点に、在宅、産業、学校、病院外来・診療所に及んだ。

(3) 研究の概要

1) 自治医科大学看護学部共同研究費による「へき地における看護活動の展開方法及びへき地診療所看護職のサポート体制づくりに関する研究」を篠澤、春山、岸、鈴木、田中、舟迫により行い、今年度は、平成15年度につづく研究をすすめた。

調査対象を第9次へき地保健医療対策実施要綱で定められた全国の「へき地診療所」のうち歯科診療所などを除いた924施設全てに勤務する看護職に対して実施した結果についてまとめた。(回収率45.6%)へき地診療所の看護活動の特性と課題についてまとめた。

この研究成果については、第3回自治医科大学シンポジウムにおいて「へき地診療所における看護活動の特性と課題(その1)(その2)」として発表した。

2) 平成16年度科学研究費補助金(基礎研究(C)(2))による研究課題「へき地における看護活

動体制の確立及びへき地診療所看護職の役割拡大に関する研究」(研究代表者：篠澤)に地域看護学領域の教員全員で取り組んだ。平成14・15年度に行った結果から看護職を対象とした研修やレポート、実施している看護活動の評価から、看護活動をより発展させるためには、看護職のサポートや研修の機会が十分でないと感じていた看護職の割合が高かった。

そこで、全国のへき地で活動している看護職を対象に「地域を捉えた看護活動の発展と看護職の役割と発展」をテーマに2泊3日の有償による研修会を実施した。参加者は、全国の診療所、中核病院、市町村、保健所の看護職13名であった。講義のほか1日目は、へき地診療所看護職の活動報告からへき地診療所看護活動の問題や工夫などの情報交換を行った。2日目は、へき地中核病院看護管理者、診療所看護師、市町村保健師がへき地における保健福祉の連携と課題について報告のあと、連携の必要性や今後の課題についてグループディスカッションし、3日目に発表し、全体討議を行った。研修会をとおして、へき地看護職の活動についての情報交換や住民や患者の健康のレベルアップのために連携し、協働して行うことの重要性が認識された。また、N県離島中核病院看護管理者と他機関との連携や研修会など看護職支援の実態把握を行った。

3) 厚生労働省科学研究費補助金による(健康科学総合研究事業)「地域の健康危機管理における保健所保健師の機能・役割に関する実証的研究」の一環として、分担研究者である春山を中心に、地域看護学領域の教員として「へき地の健康危機管理体制づくりにおける保健所保健師の活動の視点と活動方法の検討」という研究テーマに取り組み、へき地の健康危機管理体制づくりにおける保健所保健師の機能・役割と活動方法を明らかにするために、診療所看護師や保健所保健師、災害拠点病院看護師の活動事例や認識を調べた。

4) 平成16年度文部科学省科学研究費補助金(基礎研究(C)(2))による研究課題「へき地における高齢者の健康づくりと介護予防のための地域ケア体制構築に関する研究」(研究代表者：春山)に地域看護学領域の教員全員で取り組んだ。平成16年度は、平成15年度に実施したへき地診療所看護職への調査の分析によりへき地の高齢者の特徴的な健康問題と関連因子を明らかにした。また、カ

ナダのMedicine Hat Collegeの看護教育研究者、アルバータ州二次保健医療圏のひとつにあるセカンダリーレベルの病院看護職、プライマリレベルのヘルスセンター看護職への面接や討議から、へき地においてプライマリヘルスケア、セカンダリーヘルスケアを担う各々の看護職の役割や看護活動方法について示唆を得た。さらに、へき地診療所を有する2地域において高齢者の健康づくりと介護予防に関するアクションリサーチを開始した。

5) 鈴木は、平成16年度文部科学省科学研究費補助金(若手研究(B))の交付を受け、「へき地における地域ケア体制のあり方に関する研究」を行った。本年度は、へき地の地域区分のなかで離島に焦点を当て、へき地診療所看護職と市町村保健師の連携の現状、および連携の成果についての面接調査を実施した。

6) 春山、鈴木は、自治医科大学附属病院看護部と共同で「へき地等地域病院への派遣が看護実践能力にもたらす教育的効果」についての調査に取り組んだ。自治医科大学附属病院におけるへき地等地域病院への派遣制度が看護職員の看護実践能力向上にもたらす教育的効果を、派遣制度経験者の認識から明らかにするために、派遣制度を経験した看護職に対して2回にわたり質問紙調査を実施した。

(4) その他

1) 地域看護学領域の教員が中心となり、他の領域の教員とも協力して、小規模離島である東京都利島村、御蔵島村、青ヶ島村における「保健師等技術職定着のための実態調査事業」への支援を行った。平成16年度は、保健事業評価項目を作成し、各村の保健事業の現状を評価し、住民のニーズに合った保健事業の展開を検討するために、評価項目に基づき、資料、住民および保健医療福祉従事者等へのインタビュー、保健事業の参加観察等により、既存の保健事業により充足されている住民のニーズ、各保健サービスの利用しやすさ、利用しにくさを明らかにした。

2) 春山は、日本地域看護学会の教育委員として、学士課程における地域看護学(臨地実習)の到達目標についての見解、専門看護師教育における行政看護・在宅看護・産業看護・学校看護の4領域における専門看護師制度の発展の方法についての見解を他の委員と共にまとめた。日本地域看護学

会第7回学術集会(平成16年6月)においては、教育委員会主催のワークショップ「4領域(行政・在宅・学校・産業)毎の地域看護学教育の現状と課題」を実施し、学士課程における地域看護学教育の現状と課題について報告し、また行政看護領域の討議の司会・進行を務めた。

3) 篠澤, 春山, 岸, 鈴木, 佐藤は、栃木県国分寺町老人保健事業「ゆうゆう元気アップフォロー教室」の卒業生(約20名)を対象とし、元気アップ教室での学びをより深め、運動習慣の継続・生活習慣の改善などにより、住民がより健康な生活を送れることを目的とした「ゆうゆう元気アップフォロー教室」の講師として、個別指導やグループ指導、グループワークの助言、保健師への支援を行った。

4) 篠澤と春山は、平成16年度栃木県市町村保健師業務研究会が平成15年度から継続して調査研究している「地区組織の育成・支援に関する調査」について助言・指導を行った。

5) へき地診療所看護職の抱えている問題や地域の健康問題をグループディスカッションにより共有化し、地域の特性に応じた問題解決を図るための活動の展開や連携における看護者の役割、ならびに資源の少ない地域における高齢者を支援する方法を考えることを目的とした(財)地域社会振興財団主催第1回地域看護活動研修会における講師を務めた。春山, 佐藤は、「へき地診療所における看護活動」について全国のへき地診療所看護職を対象とした調査結果を基に講義した。また、篠澤, 春山, 岸, 鈴木, 佐藤は、グループワーク「地域における看護活動と看護職の役割」、「高齢者支援における地域看護活動体制と保健・医療・福祉の連携」においてファシリテーターを務めた。さらに、篠澤・岸は、「地域における看護活動と看護職の役割」のワークショップ発表の司会・進行を務めた。

6) 春山と佐藤は、公立富岡総合病院(群馬県)におけるキャリアラダー導入への支援を行った。当該病院では、スタッフのキャリアアップを支援するために平成15年度より目標管理に取り組んでいたが、スタッフ各自の実践能力の現状を反映したのではなく、適切な目標をもてない、管理者も目標達成のための支援が十分できないという課題があった。この課題に対し、平成16年度からキャリアラダーを導入したが、キャリアラダー導入

によるスタッフ、管理者それぞれへの効果を明らかにし、当該病院看護部のキャリア開発支援体制のあり方を検討するために、マネージャー等管理職から成る教育委員への支援を行った。

母性看護学

教授 成田 伸

(1) スタッフの紹介

教授 成田 伸

講師 曾我部美恵子(2005年3月31日退職)

講師 大原良子

助手 橋本かおり(2004年6月31日退職)

助手 岡本美香子(2004年4月1日就任)

資格:助産師, 看護師, 保健師, 学士(看護学)。学歴:広島大学医学部保健学科卒。職歴:広島大学附属病院産婦人科, 日本赤十字社医療センター産科病棟勤務。所属学会:日本母性看護学会。

(2) 教育の概要

1) 看護学概論(1単位:15時間, 1年次前学期)

15時間のうち, 2時間(1コマ)を成田が担当し, 母性各期における健康問題と看護のはたらきを理解するを学習課題として, 妊娠・出産・育児期(新生児期)を中心に展開される母性看護の働きを学ぶことに視点をおいて講義した。

2) 現代保健・看護セミナー(1単位:30時間, 1年次前学期)

成田は, 山本講師とともに, 最初は2本の映画の視聴を行い, そのなかにあるジェンダーの違いについてディスカッションした。その後学生と話し合った結果, 「癒し・健康」をテーマとして取り上げることになり, 資料を集め, 最終的には足浴, アロマ, 音楽等の「癒し」といわれているケアの効果を実験的に検証する作業を行った。まとめは十分とはいかなかったが, 学生も満足いくセミナーとなった。

大原は, 春山助教授とともに, 地域文化と食事および健康のテーマで, それぞれの学生が大学での教育の基礎になるレポート作成とプレゼンテーションを実施した。授業は学生が主体的に取り組めるよう配慮した。

3) 保健・看護研究セミナー(1単位:30時間, 3年次後学期)

母性看護学領域での学習を希望する17名の学生を成田, 曾我部, 大原で指導した。まず成田が研究の概要に関する講義を行った。その後, 各自が興味のある論文を探索し, そのテーマの紹介, 集めた文献の批評を全体で行い, その後教員毎に3グループに分けて進行した。グループ内で文献紹介・ディスカッションを繰り返し, 学習を深め, 全体でのまとめを行った。

4) 母性看護学概論 (1単位: 30時間, 1年次後学期)

母性看護学の概念, 対象の特性を理解し, 保健医療システムのなかで果たす看護の役割について理解することを目的に, 母性看護学の概念および機能と役割, 母性の身体的・心理的・社会的特性の理解, 母性看護の変遷と諸施策, 母性をめぐる生命倫理の現状と課題, ささまざまな立場にある母性と家族のもつ看護の問題について講義した。

5) 母性・小児保健論 (1単位: 30時間, 2年次前学期)

母性・小児保健にかかわる看護の役割を理解することを目的に, 1回目は母子 (母性・小児) 保健の重要性と意義を学習課題として, 母子保健が切り離せない関係にあることを中心に講義し, 2回目は母性と健康生活援助, 3・4回目は思春期, 5回目は成熟期, 6・7回目は更・老年期における健康増進への援助 (以上, 成田が担当) を講義した。8・9回目は小児保健における看護の役割, 10・11回目は小児期に特有な健康問題と援助, 12~14回目は, 小児期における健康増進への援助 (以上, 川口が担当) を講義した。

6) 母性臨床看護学 (2単位: 60時間, 2年次後学期)

妊娠・出産・育児期に起こる身体的・心理的・社会的変化について理解し, そのなかでの母性看護の役割を考えることを目的に実施した。30回の講義中, 5回の小テストを実施し, 復習を行いながら授業を進めた。妊娠出産は病気ではなく, 正常な身体の変化であること, セルフケアや安楽ケアに焦点をおいて妊娠中の支援, 育児期の支援についての演習を行った。

上記内容と平行して, 「何らかのリスクを持った母子とその家族の看護」というテーマの課題レポートの作成を行った。テーマと途中2回の指導を受けることについては前年と同様であったが, リスクが家族に及ぼす影響までの第1期分 (提出

期限11月末) とそれを前提にした看護を書く第2期分 (同1月中旬) に分けて提出させ, 最終提出の頃の学生の負担の軽減を図った。指導は成田と曾我部が担当した。結果として全員の学生が期限内に提出した。

7) 母性の心理と看護 (1単位: 15時間, 3年次後学期)

4年次助産学関連科目受講生選考の際の成績評価科目であるが, 受講を希望する学生は全員受講可能な科目として設定した。当初の受講生は多かったが, 最終的に32名が受講を修了した。

現代の育児期の母親が抱える問題と看護介入の方法としてのカルガリーの家族看護モデルについての講義を行った。また, 学生は, それぞれが興味のある育児期における母親が抱えるさまざまな現在の母親と家族が直面しているテーマを取り上げて意見や看護師の役割についてのレポートに取り組んだ。

8) 助産学概論 (1単位: 15時間, 3年次後学期)

「母性の心理と看護」とともに, 4年次助産学関連科目受講生選考の際の成績評価科目であり, 受講を希望する学生は全員受講可能な科目として設定した。30名の学生が受講した。

概論として, 助産学や助産師の基礎概念を押さえるとともに, 母子医療の現状や課題を国際的な視点, 日本国内の視点など, 多様な視点から分析し, 最終的により焦点化したテーマで各学生がレポートを作成した。レポート作成では複数回の個別指導を行った。

(3) 研究の概要

1) 「栃木県における母乳育児支援の構築システム開発に関する研究」(文部科学省科学研究費補助金, 基盤研究(C)(2))は, 研究代表者の川崎佳代子前教授が山形県立保健医療大学へ転任したため, 栃木県の状況に山形県の状況を加味して拡大していくこととし, 研究を継続した。平成15年に行った調査結果を「栃木県における母乳育児支援の実態調査第2部 支援提供者編」(途中経過報告書)としてまとめるとともに, 13th Congress of the Federation of Asia and Oceania Perinatal Societies, および第19回日本母乳哺育学会において発表した。また, ホームページ開設のために栃木県内・山形県内の関係者・関係機関に情報提供を求める作業を開始した。また, 「母親側と支援者側双方

からみた栃木県内における母乳育児支援の実態—入院中の支援に焦点をあてて—のテーマで看護学部紀要に報告した。(成田, 曾我部, 大原, 橋本, 岡本)

2) 平成14~15年度文部科学省科学研究費補助金による研究「産婦のモニタリングにおける助産婦と産科医の日本型協同作業モデルの開発に関する研究」に引き続く研究として、「熟練助産師の技としての分娩時モニタリングケアの構造化とその検証」を平成16~17年度文部科学省科学研究費補助金の助成を受けて行った。平成16年には、助産師が行っている分娩時モニタリングケアの構造化の基礎作業として、これまでの研究成果と文献検討から、モニタリングケアの構造化と仮のコード化を行った。(成田, 大原, 橋本, 岡本)

3) 看護学部共同研究費の助成を受けて、母性看護学領域の単独の研究として「避妊行動を必要とする女性への避妊カウンセリングのプログラムの開発に関する研究」を行った。前年度の文献・資料の研究に基づいて産褥期入院中の褥婦に対してインタビュー調査を行った。(成田, 曾我部)

4) 看護学部共同研究費の助成を受けて、領域を超えた研究として「へき地における女性と子どもの健康ニーズに関する研究」と「日本におけるへき地看護学(仮称)(Rural Nursing)の概念構築とその実践・教育プログラムの開発に関する研究」とを行った。前者については、へき地において母子訪問等を実施した経験をもつ助産師に対するインタビュー調査を行った。後者については、文献検討およびオーストラリアにおけるへき地看護実践と看護教育の実態を視察し、「オーストラリアのルーラル看護・遠隔地看護の日本における応用の可能性について」のテーマで看護学部紀要に発表した(平成17年度)。(大原, 岡本, 成田)

(4) その他

1) 成田は、平成16年度実習指導者講習会(主催: 栃木県, 実施機関: 社団法人栃木県看護協会)で助産師教育課程の講義を担当した。

2) 成田は、栃木県看護協会が主催する「看護研究: 基礎編/応用編」の講義および面接指導を担当した。

3) 成田は、自治医科大学公開講座世話人を前年から引き続いて担当した。

4) 成田は、小山市教育委員会が主催するおやま

市民大学《健康医学コース》において「男の更年期・女の更年期~からだところの状態をみつめなおしましょう」を8月7日(土)に講演した。

5) 成田は、日本助産師会栃木県支部支部長としてその役割を果たすとともに、10月7~8日に宇都宮市で開催された関東甲信越ブロック講習会の開催を担当し、また「出産のリスクマネジメント」、「地域で考える母乳育児支援」の2つのテーマで講演した。

6) 成田は、第6回日本母性看護学会学術集会において、「避妊・STD予防に対する看護職の新しい試み—避妊カウンセリング—」のテーマでワークショップを開催した。

7) 成田は、日本看護協会学術誌編集委員会委員として活動した。

小児看護学

教授 川口千鶴

(1) スタッフの紹介

教授 川口千鶴

講師 加藤晶子 (2005年2月28日退職)

講師 朝野春美

助手 多田敦子

(2) 教育の概要

1) 第1学年では、「小児看護学概論」15時間のほか、「看護学概論」において小児看護学部分を2時間、「成長と発達」の小児期部分の6時間の講義、および「現代保健・看護セミナー」30時間を担当した。

2) 第2学年では、「母性・小児保健論」の30時間のうち15時間と、「小児臨床看護学」(60時間)の講義を担当した。

3) 第3学年では、「小児看護学実習」(90時間)と「保健・看護研究セミナー」30時間を担当した。

(3) 研究の概要

1) 看護学部共同研究として、平成14年度より「自治医大周辺地域における小児看護の課題」について研究を行っている。その一環として、平成16年度は、対象地域の子どもと関わる教育・保育職が、未就学の子どもたちの健康について感じていること・考えていることを明らかにするために、

「幼稚園・保育所の子どもの健康に関するアンケート調査」を行った。アンケート配布数79施設に対し、47施設から回答が得られ、幼稚園・保育所における子どもの健康問題の実態が明らかとなった。

2) 川口が研究分担者となっている文部科学省科学研究費補助金による「子どもの在宅ケアのための組織的プログラムの開発」において、看護職と他職種の連携を目的としたパンフレットを作成した。このパンフレットは、栃木県県南部の社会資源の例を元に、病院看護職向けに社会資源活用のための知識の提供、および相談活動などにおける活用をねらいとし、自治医科大学附属病院および自治医大周辺の病院の小児看護に携わる看護職に配布した。

(4) その他

1) むつみ愛泉幼稚園において、就園前の幼児と親を対象として行われている子育て支援事業の一つとして「びよびよキッズ育児相談交流会」を企画・運営した。平成16年度は、6回実施した。

2) 小児看護に関心がある看護職などを対象に学習会を行った。テーマは、「ドイツ・スウェーデンの小児病院」と「医療的ケアが必要な子どもの日常」であった。

成人看護学

教授 中村美鈴

(1) スタッフの紹介

教授 塚越フミエ (2005年3月31日退職)

講師 中村美鈴

講師 水野照美

講師 山本洋子

助手 友竹千恵 (2004年12月1日退職)

助手 村上礼子

助手 黒田光恵 (2004年4月1日就任)

資格：看護師。職歴：埼玉県立小児医療センター、慶応義塾大学附属病院救急部（臨時職員）、自治医科大学附属大宮医療センター勤務。

(2) 教育の概要

1) 成人看護学概論

「成人看護学概論」は、1年次後学期2単位30

時間の必修科目である。学習目的は、成人がもつ多様な健康上の問題とそれに対する看護の役割、ならびに看護を行う際に役立つ理論を学習し看護の概要を理解することである。成人期における健康問題の多様性、急性期・慢性期など各健康レベルにある成人・家族の看護の概要、セルフケア、危機理論、ケアリング、看護専門職としての看護実践の倫理など、成人看護に必要な知識・理論について講義を行った。塚越が16時間、中村が4時間、水野が4時間、山本が4時間の講義を担当した。

2) 成人臨床看護学 I

「成人臨床看護学 I」は、2年次後学期2単位60時間の必修科目である。学習目的は、機能障害をもつ成人とその家族の健康への回復と生活への適応に向けて、必要な看護を学習することである。消化・吸収機能障害、栄養・代謝機能障害、呼吸機能障害、循環機能障害をもつ成人・家族の把握とその方法、ならびに必要な看護について講義を行った。さらに、手術療法を受ける患者の看護、生命の危機状況にある成人の看護、看護過程の展開について、講義と演習を行った。塚越が8時間、中村が20時間、水野が16時間、山本が12時間の講義・演習を担当した。

3) 成人臨床看護学 II

「成人臨床看護学 II」は、2年次後学期2単位60時間の必修科目である。学習目的は、機能障害をもつ成人とその家族の健康への回復と生活への適応に向けて、必要な看護を学習することである。内部環境調節機能障害、身体防御機能障害、神経・感覚機能障害、運動機能障害、性・生殖機能障害をもつ成人とその家族に必要な看護について講義を行った。さらに、がんを患う患者・家族の看護、事例を用いた看護過程の展開について演習を行った。塚越が22時間、中村が14時間、水野が8時間、山本が12時間の講義・演習を担当した。

4) 成人看護学実習 I

「成人看護学実習 I」は、2年次後学期3単位135時間の必修科目である。学習目的は、健康障害によって入院治療している成人期にある人を多面的に理解し、看護師－患者関係を基盤に看護過程を展開できる基礎的能力を養うこと、また実習を通して、看護の機能や役割について理解を深めることである。自治医科大学附属病院の外科系・内科系病棟に1グループ6～7名の学生を配置し、16病棟に分かれて実習を行った。方法は、内科的

治療もしくは外科系治療を受ける成人とその家族を1~2名受け持ち、3週間継続して臨地実習を行った。実習中は、カンファレンスを通じて学生が相互に刺激し合い、受け持ち患者の看護や現場での疑問について方向性を見出すなど、成人看護について多くの内容を学び得た。また、看護専門職にふさわしい姿勢・態度を養うことも重要視して指導した。塚越は実習全体の統括を行い、他領域の助手ならびに成人看護学の中村、水野、山本、村上が実習指導を担当した。

5) 成人看護学実習Ⅱ

「成人看護学実習Ⅱ」は、3年次前学期3単位135時間の必修科目である。学習目的は、「成人看護学Ⅰ」で経験した看護過程の展開能力を基盤に、既習の専門知識や文献等の知見を取り入れ、成人患者とその家族に必要な看護支援を考えるための能力を高めることである。具体的な実習目的は、機能障害をもつ成人とその家族の健康と幸せを目指した看護を創造するための基礎的能力を培うとした。自治医科大学附属病院の外科系・内科系病棟に1グループ5名の学生を配置し、8病棟に分かれて実習を行った。方法は、内科的治療、ならびに外科系治療を受ける成人とその家族を受け持ち、3週間継続して臨地実習を行った。実習中は、学生が主体的にテーマカンファレンス、あるいはケースカンファレンスを行い、活発に意見交換し、受け持ち患者の看護について深く考える機会となった。また、担当教員は、看護専門職としての倫理観、探究的姿勢・態度を培うことを主眼に指導した。学生は、臨地実習で成人患者とその家族の体験を実際に知り、信頼関係を丁寧に育みながら、その人の望む方向に向かって看護支援を実践できるよう取り組んでいた。塚越は実習全体の統括を行い、中村は3クール、水野は4クール、山本は4クール、友竹は4クール、村上は4クールの実習指導を行った。

6) フィールド実習

「フィールド実習」は、3年次後学期2単位30時間の必修科目である。学習目的は、さまざまな健康レベルおよび生活の場（環境を含む）における看護の役割特性と課題について学習することである。成人看護学領域では、外来看護を主に担当し、次の3点を実習目標とした。①地域で生活しながらさまざまな健康上の問題を持ち、外来を受診する人々への看護の役割を理解する。②救急外来を

受診する人々とその家族への看護の役割を理解する。③外来を受診する人々とその家族が地域社会生活を営む上での看護の課題について考える。実習方法は、自治医科大学附属病院の総合案内から各科外来へ向かう初診患者、夜間救急外来を受診する患者・家族、透析センター、内科外来処置室、外来点滴センターのいずれかで継続治療を受ける患者を担当し、看護の役割について理解を深めた。また、看護の課題については、グループワークを行い、討議ならびに発表で理解を深められるよう指導した。塚越、中村、水野、山本、村上、黒田の全員が4週間実習を担当した。

7) 現代保健・看護セミナー

「現代保健・看護セミナー」は、1年次前学期1単位30時間の選択科目である。学習目的は、身近な生活や体験のなかから保健および看護につながる問題を見出し、現在の保健および看護が直面する課題に関連づける方法を学習することである。このセミナーは、教員2名がグループワーク、文献学習、討議、見学（必要時）等の方法で、学生の関心のあるテーマを尊重しつつ、学習を深めた。塚越は余語講師（一般基礎）、中村は高村教授（一般基礎）、水野は竹田教授（専門基礎）、山本は成田教授（母性看護学）と、それぞれ9名の学生を担当した。

8) 保健・看護研究セミナー

「保健・看護研究セミナー」は、3年次後学期1単位30時間の選択科目である。学習目的は、保健・看護に関する研究テーマの選び方、研究の進め方について学ぶことである。このセミナーは、学生が各自関心のある看護に関する文献を検索する方法、ならびに論文を講読し、看護に関するテーマの多様性の理解、討議を通して看護学に対する視野を広げることを小グループ制（1グループ5~6名）で行った。グループワークは、個々の学生が自分の興味ある内容の論文を批判的に読み、その結果を各グループメンバーがプレゼンテーションし、その後討議を行うという形式で実施した。塚越、中村、水野、山本の4名で、21名の学生を担当した。

(3) 研究の概要

1) 成人看護学における共同研究では、前年度から引き続き「化学療法を続ける通院がん患者の家族員が体験する困難」をテーマに通院治療を続け

るがん患者の家族員に対する援助を検討した。11名の家族員に外来で面接調査を行い、得られたデータを質的帰納的に分析した。その結果、家族員の体験する6つの困難が明らかになり、その困難に対する看護支援の示唆を得ることができた。その成果は、自治医科大学看護学部紀要第3巻に原著論文として掲載される。

2) 中村は、平成16年度に交付された文部科学省科学研究費補助金萌芽研究のテーマ「胃切除患者の栄養状態回復と食生活行動に関する研究」に基づき、調査、データ分析・考察を行い、研究分担者(城戸)と共に結果報告書を作成した。

3) 水野は、2月に日本がん看護学会第18回学術集会の一般演題示説にて座長を務めた。また、11月に栃木看護学会第10回学術集会の一般演題口演にて座長を務めた。

(4) その他

1) 栃木県看護協会臨床指導者講習において、塚越は実習指導の原理(3時間)、中村は実習指導の原理(6時間)、水野は看護論(6時間)の講義を担当した。

2) 中村は、栃木県健康増進課主催の糖尿病予防対策事業の一環として、ピアの手法を導入して若者が同世代の健康教育を促進するためのリーフレット作成委員会のスーパーバイザーを高村教授(一般基礎)と共に務めた。

3) 中村は、2004年10月の学園祭で「エビデンスに基づいた看護実践」というテーマで講演を行った。

4) 中村は、2004年7~9月に4回にわたり日生病院の「フィジカルアセスメント実践セミナー」(呼吸器系、循環器系、消化器系、神経系)の講師を務めた。

5) 黒田は、前学期3年次実習(1クール目~5クール目)では、小児看護学の実習を担当した。

老年看護学

教授 水戸美津子

(1) スタッフの紹介

教授 水戸美津子 (2004年4月1日就任)

資格：学校教育学博士(兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科博士課程)。職歴：聖路加国

際病院・病棟看護師、虎ノ門病院・病棟および看護教育部教育担当看護師として勤務後、千葉県立衛生短期大学成人看護学助手・老年看護学講師、新潟県立看護短期大学老年看護学助教授、山梨県立看護大学老年看護学教授および大学院看護学研究科科長を経て着任。

講師 高木初子

助手 内海香子

助手 林美鳥 (2004年4月1日就任)

資格：社会学修士(淑徳大学社会学部社会学専攻博士前期課程)。職歴：自治医科大学附属病院大宮医療センターおよび自治医科大学附属病院病棟看護師を経て着任。

(2) 教育の概要

老年看護学領域では、老年期にある人の病気や障害にのみ焦点をあてるのではなく、加齢現象をふまえて高齢者の発達課題やその健康特性および健康障害を理解し、それに伴って生じてくる生活障害に対する看護の方法について学ぶと同時に、老年看護技術を取得することを目指して教育実践活動を展開している。

1) 老年看護学に関する教育概要

【老年看護学概論】

「老年看護学概論」は、2年次前学期2単位の必修科目である。科目の目的は、老年看護学の概念・対象および老年看護学の役割とその理論を学ぶことである。さらに下位の目標として、①老年看護学の概念と歴史について理解する、②老年看護学の対象を理解する、③高齢者の健康問題と老年看護の役割について理解する、④老年看護学の理論的背景について理解することの4点をあげている。特に高齢者を理解することに重点を置き、演習として高齢者へのインタビュー活動を取り入れている。履修学生数は107名であった。水戸と高木が担当した。

【老年臨床看護学】

「老年臨床看護学」は、2年次後学期2単位の必修科目である。科目の目的は、健康障害をもつ高齢者が日常生活に適応できるよう、高齢者と家族に応じた看護活動を展開するための方法について学ぶことである。さらに下位の目標として、①高齢者の健康、生活機能レベルの変化と看護活動について理解する、②高齢者の健康障害と経過の特

徴について理解する, ③高齢者に特有な症候とその看護について理解する, ④高齢者に多い疾患と看護について理解する, ⑤高齢期ターミナルケアについて理解する, ⑥老年看護をめぐる倫理的課題を理解することの6点をあげている。老年看護技術の理解と修得のため学内演習を積極的に取り入れている。また, 老年看護学分野は他職種との協働が多いことから倫理的態度の育成はことさら重要であるとの認識から, 倫理的態度の育成のために事例を用いた演習を行っている。履修学生数は97名である。水戸と高木が担当した。

【老年看護学実習】

「老年看護学実習」は, 3年次前学期2単位の必修科目である。科目の目的は, 病院・介護老人福祉施設において, 疾病や障害をもつ高齢者に対する看護を実践するための基礎知識・技術について学ぶことである。下位の目標は, ①高齢者の身体・心理・社会的特徴を多面的に理解する, ②疾病や障害のレベルを理解した上で, 高齢者とその家族への個別的援助方法を学ぶ, ③保健・医療・福祉の連携のなかでの看護職の役割と機能について学ぶ, ④高齢者ケアの倫理的課題について考察し, 援助を行うこととしている。全体で3週間実習を組んでおり, 前半を自治医科大学附属病院での病棟実習, 後半は老人保健施設および福祉施設と通所リハビリテーション施設における実習である。病院実習では4病棟を使用し, 高木, 内海, 林が担当し, 残り1病棟を基礎看護学から助手1名の応援を得て実施した。病院実習では治療を受ける高齢者を受け持ち, 疾病や障害が最後のライフステージにある人に及ぼす影響について理解すること, 施設での実習では在宅を見据えたなかでの高齢者ケアのあり方について考察し, 合わせて様々な健康レベルにある高齢者を理解することに重点を置いている。履修学生は97名であった。

【成人・老年保健論】

「成人・老年保健論」は, 2年次前学期2単位の必修科目である。成人看護学塚越教授と水戸で分担し, 老年保健論(1単位分)を水戸が担当した。この科目のうち老年保健論の目的は, ①高齢者の生活習慣とセルフケア・ヘルスプロモーションについて理解すること, ②高齢者の保健・医療・福祉施策について理解すること, ③高齢者の健康保持増進と看護の役割を理解することである。老年保健論では, 地域で生活する健康な高齢者, およ

び在宅で療養生活を送る高齢者に対する健康増進と健康の維持向上をめざしたマクロ的アプローチについて講義した。履修学生は97名であった。

2) 全領域に関わる教育概要

【看護学概論】

「看護学概論」は, 1年次前学期1単位の必修科目である。科目の目的は, 人々の健康における看護の働きに関する概要を理解し, 看護学を学ぶための基盤を養うことである。7看護学領域の教授が担当し, 水戸は, 老年期における健康問題について, 自立や社会生活を拡大していくという視点から看護の役割および機能を理解することを目的に1コマを担当した。

【成長と発達】

「成長と発達」は, 1年次後学期1単位の必修科目である。科目の目的は, 胎児期から小児期, 成人期, 老年期にいたる人の成長と発達について学ぶことである。教授4名で担当し, 水戸は老年期における“発達”の捉え方を理解し, 人生の最終段階における発達課題について学習することを目的に1コマを担当した。

【現代保健・看護セミナー】

「現代保健・看護セミナー」は, 1年次前学期1単位の選択科目である。科目の目的は, 身近な生活や体験のなかから, 保健および看護につながる問題を見出す方法を学習することである。水戸は基礎看護学講師と組み, 高木は専門基礎の竹田教授と組んで, 各々で学生の決めたテーマに沿いながら討論を中心とした学習を進めた。

【保健・看護研究セミナー】

保健・看護研究セミナーは, 3年次後学期1単位の選択科目である。科目の目的は, 保健・看護に関する研究テーマの選び方, 研究の進め方について学ぶことである。さらに下位の目標は, ①看護に関連するようなテーマに添って, 文献購読や討議・検討などを行うこと, ②卒業研究で取り上げるテーマと研究方法について検討すること, ③学習過程で研究とは何か, 研究のすすめ方, 研究活動における倫理的配慮とその方法について理解を深めることである。文献購読を行い, グループ内で討論しながら進めた。水戸と高木が担当した。履修学生数は11名であった。

【基礎看護学実習 I】

「基礎看護学実習 I」は, 1年次後学期1単位の

必修科目である。科目の目的は、看護実践の理論的根拠と問題解決過程を理解し、あらゆる看護実践の共通基盤となる看護技術を学習することである。自治医科大学附属病院での5日間の実習である。科目責任は基礎看護学となっており、内海、林が呼吸器内科病棟と消化器外科・一般外科病棟を担当した。担当学生数はそれぞれ6名であった。

【基礎看護学実習Ⅱ】

「基礎看護学実習Ⅱ」は、1年次後学期1単位の必修科目である。科目の目的は、日常の生活行動に関連する援助としての看護実践に必要な理論と看護技術について学習することである。自治医科大学附属病院での10日間の実習である。科目責任は基礎看護学となっており、内海、林が呼吸器内科病棟と消化器外科・一般外科病棟を担当した。担当学生数はそれぞれ6名であった。

【成人看護学実習Ⅰ】

「成人看護学実習Ⅰ」は、2年次後学期3単位の必修科目である。科目の目的は、健康障害によって入院治療を受けている成人期にある人を多面的に理解し、看護師－患者関係を基盤に看護過程を展開できる基礎的能力を養う、また実習を通して看護の機能や役割について理解を深めることである。自治医科大学附属病院での15日間の実習である。科目責任は成人看護学となっており、内海、林が呼吸器内科病棟と消化器外科・一般外科病棟を担当した。担当学生数はそれぞれ6名であった。

【フィールド実習】

「フィールド実習」は、3年次後学期3単位の必修科目である。科目の目的は、さまざまな健康レベルおよび生活の場における看護の役割特性と課題について学習することである。実習は、在宅看護フィールド実習、学校・産業フィールド実習、外来・救急看護フィールド実習、へき地フィールド実習で構成されている。科目責任は地域看護学となっており、内海と林が芳賀赤十字訪問看護ステーションと訪問看護ステーションたんばぼを担当した。水戸は企画と最終カンファレンスに出席した。

3) 教育上での他機関との交流

【大学院での研究指導】

水戸は、山梨県立看護大学大学院看護学研究科地域老年看護学分野専攻の大学院生2名を客員教授として研究指導し、修了させた。その修士論文

テーマは、①痴呆性高齢者を在宅で介護する「嫁」の介護意識の変容、②通所施設を利用する痴呆性高齢者のエンパワメントを引き出す援助に関する研究であった。さらに、放送大学大学院文化科学研究科で客員教授として院生1名の研究指導にあたり修了させた。修士論文テーマは、臨地実習指導者教育の現状と課題に関する研究である。

【大学院特別講義】

水戸は、富山医科薬科大学大学院看護学研究科非常勤講師として、精神看護学演習のうち2コマで質的研究法修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (M-GTA) について講義した。

(3) 研究の概要

老年看護学領域では、自治医科大学看護学部共同研究費による研究として、附属病院看護部整形外科病棟の看護師らと、研究課題「高齢者大腿骨頸部骨折患者の術後の生活行動拡大のプロセスに関する研究－退院後の面接調査からの分析－」に取り組み、文献検討、データの収集を行った。現在も継続中である。

水戸は、日本福祉工学会理事ならびに査読委員長を務めた。実践的グラウンデッド・セオリー・アプローチ (M-GTA) 研究会の世話人として活動し、第5回公開研究会では「修正版：グラウンデッド・セオリー・アプローチの分析技法」を講演した。

水戸は、山梨県立看護大学大学院の教員らと「看護職者の生涯学習ニーズとその支援状況」を研究中 (研究期間3年の予定) である。これは、3つの分担研究から構成されており、水戸は「一般看護職を対象とした調査」の分担責任者として活動している。平成16年度研究報告書の作成および日本看護管理学会にて報告を行うとともに、平成17年2月には本調査にご協力いただいた県内諸機関の方々に対し、示説による報告会を開催した。

内海は、平成15年度看護学部共同研究費による研究の一部を平成16年度第3回自治医科大学シンポジウムにおいて報告した。

(4) その他

1) 水戸は、市民大学等の講師、看護協会主催の研修会の講師、福祉職等に対する研修会講師、患者会活動への支援、自治体事業への協力等の活動を行った。その内容は以下の通りである。

【市民大学等の講師】

平成17年1月、おやま市民大学において「老年期を生き活きと」を講義した。

【看護協会主催の研修会の講師】

平成16年10月、栃木県看護協会主催の看護職員実務研修会で「リーダーシップについて」を3箇所で講義した。

平成16年10月、山梨県看護協会主催の訪問看護師研修会で「エンパワメントを目指した訪問活動」について講演した。

平成17年2月、山梨県看護協会主催訪問看護師研修会で「事例検討」について講義した。

【福祉職等に対する研修会の講師】

平成16年10月栃木県痴呆性高齢者グループホーム開設予定者等研修会講師として「介護の歴史的背景と基本理念」、「グループホームにおけるこれからの痴呆ケアのあり方」を講義した。

平成17年3月、とちぎ健康福祉協会主催の介護者研修会で「知は力なりー老いの心と身体の変化ー介護ストレスを和らげるために」を講演した。

平成17年3月、社会福祉法人さくら会において「高齢者の心身の特色と介護」について講演した。

【患者会活動への支援】

平成16年12月全国呆け老人家族の会代議員会へ、林と出席した。

【自治体事業への協力】

平成12年より、山梨県身体拘束解消推進会議議長として事業の企画への参加、身体拘束解消推進事業のアドバイザー、研修会講師として高齢者ケアに従事する人たちへの教育・啓蒙活動をしている。

平成16年9月、山梨県長寿やまなし財団主催による「身体拘束解消にむけて」の事例検討及び講義をした。

【看護学部主催臨床指導者研修会】

平成16年8月および10月の2回看護学部主催による臨床指導者研修会において「看護教育における方法」を講義した。

2) 高木は、栃木県看護協会臨床指導者講習において、実習指導の評価（6時間）の講義を担当した。

研究業績録

学 部 長

(2) 学会発表

1) 森川浩子, 野口美和子, 友竹千恵, 土屋陽子, 大谷由香, 正木治恵, 中村伸枝, 清水安子, 古賀久美子, 出野慶子, 江川隆子, 稲垣美智子, 多崎恵子, 村角直子, 黒江ゆり子, 普照早苗, 藤澤まこと: 日本における糖尿病自己管理アウトカム指標の開発. 第47回日本糖尿病学会, 東京. 2004年5月14日. (糖尿病 47(Suppl.1);156, 2004)

2) 鳥飼紀子, 横山のぶ子, 大神ヨシ子, 内海香子, 野口美和子, 清水安子, 黒田久美子: 虚血性心疾患を合併する糖尿病患者に対する小規模グループ指導プログラムの開発. 第9回日本糖尿病教育・看護学会, 松山市. 2004年9月18日. (日本糖尿病教育・看護学会誌 18 (特別号);213, 2004)

(4) その他

1) 内海香子, 神山幸枝, 高木初子, 余語琢磨, 篠澤悦子, 野口美和子: 軽度の脳血管障害を発症した前期高齢者のセルフケア身体的・社会的影響, 病気の受けとめ, セルフケアに取り組む気持ち, セルフケア行動からの検討. 自治医科大学看護学部紀要, 2;55-67, 2004.

一般基礎

(1) 原著論文

1) 渡辺純一, 堀内成子, 小陽美紀, 竹内千恵子, 片桐麻州美, 高村寿子: ピアカウンセラー養成セミナー受講後フォローアップ評価. 思春期学, 22(1);167-174, 2004.

2) 余語琢磨: 「アトピー」のインターネット医療民族誌. 現代のエスプリ, 439;155-163, 2004.

3) 佐々木幹雄, 余語琢磨: 須恵器の色ー実験的復元と理化学的分析からみた窯業技術. 古代, 112;121-150, 2004.

4) 梅崎高行, 余語琢磨: 閉じた共同性と開かれた共同体のはざまー参加者の軌轢とアイデンティティからみた祭り集団の変容と再生産. 生活学論叢, 9;3-18, 2004.

(2) 学会発表

1) 高村寿子: 健康教育・ヘルスプロモーション

におけるエビデンスとは「教育学・心理学の立場から」. 第13回日本健康教育学会, 栃木. 2004年6月4日. (第13回日本健康教育学会講演集 76-77, 2004)

2) 渡辺純一, 堀内成子, 小陽美紀, 竹内千恵子, 高村寿子: 思春期ピアカウンセラー養成セミナーのカリキュラム作成. 第13回日本健康教育学会, 栃木. 2004年6月5日. (第13回日本健康教育学会講演集 268-269, 2004)

3) 前田ひとみ, 石田登喜子, 羽入雪子, 菅野クニ, 篠澤悦子, 高村寿子: ピアカウンセリング・ピアエデケーションのマニュアル作成及び効果的普及に関する研究. 第13回日本健康教育学会, 栃木. 2004年6月5日. (第13回日本健康教育学会講演集 270-271, 2004)

4) 渡辺 至, 篠澤悦子, 高村寿子, 中村好一: 高校生における性に関するピアカウンセリングの短期的影響. 第63回日本公衆衛生学会総会, 松枝市. 2004年10月26日. (第63回日本公衆衛生学会総会抄録集 606, 2004)

5) 信川益明, 大櫛陽一, 大道 久, 寛 淳夫, 河口 豊, 北村昌之, 白髪昌世, 須古博信, 鈴木 荘太郎, 関田康慶, 寺崎 仁, 長澤 泰, 名和肇, 橋本廸生, 福田 敬, 舟谷文男, 山内一信, 渡辺一平, 渡邊亮一: 保健・医療・福祉の連携推進システム構築の方法論と評価手法の開発に関する研究. 第42回日本病院管理学会学術総会, 熊本市. 2004年11月5日. (第42回日本病院管理学会学術総会演題抄録集 207, 2004)

6) 渡邊亮一: 医科大学や看護大学の情報学教育と医療情報技師の育成. 第24回医療情報学連合大会 (第5回日本医療情報学会学術大会), 名古屋市. 2004年11月27日. (第24回医療情報学連合大会論文集 262-264, 2004)

(3) 著書・総説

1) 高村寿子: 健康教育プログラム実践マニュアル (自己効力感を高め, 主体的行動変容を目指す). 日本家族計画協会, 2004.

2) 余語琢磨: 古代窯業技術論ー焼成実験と遺構計測値から読み解く窯焚き技術と築窯プラン. 須恵器窯の技術と系譜(2)ー8世紀中頃から12世紀を中心にして, 9-22, 窯跡研究会, 2004.

(4) その他

- 1) 廣瀬康行, 仲野俊成, 中川 肇, 山内一史, 太田吉夫, 渡邊亮一, 山本和子, 赤澤宏平: 2004年度医療情報技師講習会スライド集. pp. 40-49, 日本医療情報学会医療情報技師育成部会, 2004.
- 2) 内海香子, 神山幸枝, 高木初子, 余語琢磨, 篠澤悦子, 野口美和子: 軽度の脳血管障害を発症した前期高齢者のセルフケア身体的・社会的影響, 病気の受けとめ, セルフケアに取り組む気持ち, セルフケア行動からの検討. 自治医科大学看護学部紀要, 2;55-67, 2004.

- 7) 竹田津文俊: 循環器疾患. 月刊ナーシング, 24(12);29-80, 2004.
- 8) 竹田津文俊: 消化器疾患. 月刊ナーシング, 24(12);81-130, 2004.
- 9) 竹田津文俊: 代謝疾患. 月刊ナーシング, 24(12);131-156, 2004.
- 10) 竹田津文俊: 血液疾患. 月刊ナーシング, 24(12);157-177, 2004.
- 11) 竹田津文俊: 腎疾患. 月刊ナーシング, 24(12);179-194, 2004.
- 12) 竹田津文俊: 脳・神経疾患. 月刊ナーシング, 24(12);195-225, 2004.
- 13) 竹田津文俊: がんの発症のメカニズム. 月刊ナーシング, 24(12);226-227, 2004.

専門基礎

(2) 学会発表

- 1) 竹田俊明, 村松慎一, 玉田太朗: 新しい漢方処方支援システム 漢方の発展と普及のために. 第55回日本東洋医学会学術総会, 横浜市, 2004年6月25日. (第55回日本東洋医学会学術総会講演要旨集 (日本東洋医学雑誌第55巻別冊) 232, 2004)
- 2) Todaka H., Taniguchi J., Sato J., Mizuno A., Takeda T., Suzuki M.: Warm temperature-sensitive TRPV4 plays an essential role in thermal hyperalgesia. 34th Annual Meeting of Society for Neuroscience, Washington DC. 2004. (Abstract of 34th Annual Meeting of Society for Neuroscience 288, 2004)

(3) 著書・総説

- 1) 竹田俊明: 脳の形. 形の科学百科事典 (形の科学会編). 朝倉書店 (東京), 2, 2004.
- 2) 竹田俊明, 竹田津文俊: スタンダード図書・雑誌紹介 第42回 看護学部・専門基礎部門「人体の構造と機能 I, II, 疾病と病態 I」. 自治医科大学図書館ニュース, 23(10);3, 2004.
- 3) 竹田津文俊: TGF- β と肺気腫. BIO Clinical, 9(3);88-92, 2004.
- 4) 竹田津文俊: 消化器. 人体の構造と機能 (佐伯由香, 北村 聖編). ノーヴェルヒロカワ, 255-295, 2004.
- 5) 竹田津文俊: 消化器. 人体の構造と機能 整理ノート (佐伯由香, 北村 聖編). ノーヴェルヒロカワ, 40-49, 2004.
- 6) 竹田津文俊: 呼吸器疾患. 月刊ナーシング, 24(12);5-27, 2004.

基礎看護学

(2) 学会発表

- 1) 大久保祐子, 伊澤奈津子, 大川陽子: 臨床看護におけるボディメカニクスの活用—アンケート調査から見た実際と課題. 日本人間工学会第45回大会, さいたま市. 2004年6月5日. (日本人間工学会誌 40(特別号);246-247, 2004)
- 2) 大久保祐子, 豊田省子, 里光やよい, 角田こずえ, 亀田真美: 看護技術 O S C E の実践事例と技術試験の今日的課題. 日本看護学教育学会第14回学術集会 (交流セッション7), 山形市. 2004年7月25日. (日本看護学教育学会第14回学術集会講演集 287, 2004)
- 3) 清水裕子, 矢田志緒, 梅村美代志, 大学和子, 鈴木玲子, 横井郁子, 真砂涼子, 大久保祐子, 豊田省子, 里光やよい, 角田こずえ, 亀田真美, 菊池真由美, 中原るり子: 看護教育における S P 活用の現状と展望. 交流セッション企画運営, 日本看護学教育学会第14回学術集会, 山形市. 2004年7月25日. (日本看護学教育学会第14回学術集会講演集 287, 2004)
- 4) 角田こずえ, 亀田真美, 大久保祐子, 里光やよい, 豊田省子, 野中 静: 基礎看護学の評価方法に関する研究—客観的臨床能力試験における評価表の検討—. 第10回栃木看護学会学術集会, 宇都宮市. 2004年11月17日. (第10回栃木看護学会学術集会 80;11,10,1, 2004)
- 5) 里光やよい, 瀨瀬葉月, 須釜なつみ, 市塚京

子, 佐藤淳子, 鈴木照実, 古橋洋子: ナースのキャリアアップと看護師長の関わり (第2報), 第24回日本看護科学学会学術集会, 東京. 2004年12月4日. (第24回日本看護科学学会学術集会講演集 539, 2004)

(3) 著書・総説

1) 里光やよい: 第2章 看護診断が抽出できるデータベースのアセスメントのヒント 活動/運動, 睡眠/休息, 認知/知覚. 実践! 看護診断を導く情報収集・アセスメント (古橋洋子編著). 学習研究社, 51-91, 2004.

2) 大久保祐子, 里光やよい, 角田こずえ, 亀田真美, 豊田省子, 野中 静: 看護実践能力試験の試み—SPへの看護体験は成長のチャンス. 看護教育, 45(10):839-843, 2004.

(4) その他

1) 松田たみ子: 日本人間工学会第45回大会 (2004年6月5日) のシンポジウム「人間工学と医療・看護・福祉とのコラボレーション—近未来に向けたヒューマンケアの探求—」において, 『生体情報から看護の根拠を考える』というテーマでシンポジストを務めた。

2) 松田たみ子: 第5回日本看護科学学会国際学会 (2004年8月29日) の駅伝シンポジウムにおいて, 「Practical Use of Vital Signs as Evidence for Effective Nursing Intervention」というテーマでシンポジストを務めた。

地域看護学

(2) 学会発表

1) 岸恵美子: 虐待親子の遊びグループ活動. 第8回日本在宅ケア学会学術集会, 東京. 2004年1月24日.

2) 篠澤侠子, 高村寿子, 矢板橋チヅ子: 高校生のピアカウンセリングニーズと普及に関する課題. 第7回日本地域看護学会学術集会, 大阪. 2004年6月12日. (第7回日本地域看護学会学術集会講演集 179, 2004)

3) 鈴木久美子, 田中幸子, 岸恵美子, 春山早苗, 篠澤侠子: へき地診療所における看護活動の特性と課題 (その1). 第7回日本地域看護学会学術集

会, 大阪. 2004年6月13日. (第7回日本地域看護学会学術集会講演集 190, 2004)

4) 春山早苗, 田中幸子, 鈴木久美子, 岸恵美子, 篠澤侠子: 精神障害者を支える市町村地域ケア体制づくりに必要な保健師の視点と活動方法—ホームヘルプサービス事業に関わる保健師活動から—. 第7回日本地域看護学会学術集会, 大阪. 2004年6月13日. (第7回日本地域看護学会学術集会講演集 142, 2004)

5) 田中幸子, 鈴木久美子, 岸恵美子, 春山早苗, 篠澤侠子: へき地診療所における看護活動の特性と課題 (その2). 第7回日本地域看護学会学術集会, 大阪. 2004年6月13日. (第7回日本地域看護学会学術集会講演集 191, 2004)

6) 岸恵美子, 田中幸子, 鈴木久美子, 春山早苗, 篠澤侠子: 保健福祉行政サービスで期待される看護の役割と機能. 第7回日本地域看護学会学術集会, 大阪. 2004年6月13日. (第7回日本地域看護学会学術集会講演集 212, 2004)

7) 田中幸子, 鈴木久美子, 岸恵美子, 春山早苗, 篠澤侠子: へき地診療所で働く看護職の認識による看護活動の特性および職務満足度との関連—へき地診療所看護職の全国調査から—. 第9回日中看護学会, 重慶 (中国). 2004年9月20日. (第9回日中看護学会論文集録 113-115, 2004)

8) 岸恵美子, 佐藤 (田中) 幸子, 鈴木久美子, 春山早苗, 篠澤侠子, 青山初枝: 高齢者の運動習慣と身体的心理的側面との関連. 第35回日本看護学会—地域看護—, 高知市. 2004年10月.

9) 春山早苗, 鈴木久美子, 佐藤幸子, 岸恵美子, 篠澤侠子, 錦織正子, 松永敏子, 藤本眞一, 牛尾裕子, 宮崎美砂子: へき地診療所看護職の健康危機管理に関わる活動の現状と認識. 第63回日本公衆衛生学会, 松江市. 2004年10月27日. (日本公衆衛生雑誌 51(10):398, 2004)

10) 牛尾裕子, 石川麻衣, 関龍太郎, 藤谷明子, 安田貴恵子, 春山早苗, 錦織正子, 松永敏子, 藤本眞一, 宮崎美砂子: 市町村保健師による健康危機事例発生時の活動実態. 第63回日本公衆衛生学会, 松江市. 2004年10月27日. (日本公衆衛生雑誌 51(10):393, 2004)

11) 錦織正子, 松永敏子, 春山早苗, 藤本眞一, 牛尾裕子, 宮崎美砂子: 健康危機発生時における市町村保健師の役割と今後の課題—危機発生時の活動事例より—. 第63回日本公衆衛生学会, 松江

市. 2004年10月27日. (日本公衆衛生雑誌 51(10);394, 2004)

12) 宮崎美砂子, 武藤紀子, 牛尾裕子, 春山早苗, 錦織正子, 松永敏子, 藤本眞一: 保健所保健師の健康危機管理に対する活動実態からみた保健師の機能・役割. 第63回日本公衆衛生学会, 松江市. 2004年10月27日. (日本公衆衛生雑誌 51(10);394, 2004)

13) 岸恵美子: 中年期女性にとって配偶者を介護することの意味—失語症の夫を介護する妻のライフストーリー—. 第24回日本看護科学学会学術集会, 東京. 2004年12月. (日本看護科学学会学術集会講演集 24;494, 2004)

14) 前田ひとみ, 高村寿子, 渡辺純一, 橋本美知代, 篠澤侠子: Strategy of Youths-to-Youths Sex Education in Japan 1. World Conference on Health Promotion and Health Education, Melbourne. 2004.

15) 前田ひとみ, 高村寿子, 渡辺純一, 橋本美知代, 篠澤侠子: Strategy of Youths-to-Youths Sex Education in Japan 2. World Conference on Health Promotion and Health Education, Melbourne. 2004.

(3) 著書・総説

1) 高崎絹子, 吉岡幸子, 小野ミツ, 岸恵美子: 病弱者・高齢者のアドボカシーと高齢者虐待. 訪問看護と介護, 9(11);847-855, 2004.

(4) その他

1) 鈴木久美子, 田中幸子, 岸恵美子, 春山早苗, 篠澤侠子: へき地診療所において発展させるべき看護活動. 自治医科大学看護学部紀要, 2;5-16, 2004.

2) 内海香子, 神山幸枝, 高木初子, 余語琢磨, 篠澤侠子, 野口美和子: 軽度の脳血管障害を発症した前期高齢者のセルフケア—身体的・社会的影響, 病気の受けとめ, セルフケアに取り組む気持ち, セルフケア行動からの検討—. 自治医科大学看護学部紀要, 2;55-67, 2004.

3) 田村一美, 葭葉敬江, 篠澤侠子: ピアカウンセリング・ピアエデュケーションのマニュアル作成及び効果的普及に関する研究—民間団体(とちぎ思春期研究会)のピアカウンセリング事業の取り組み—. 厚生労働科学研究(子ども家庭総合研究事業)平成15年度報告書, 2004.

4) 中村好一, 篠澤侠子, 渡辺 至: ピアカウ

セリング・ピアエデュケーションのマニュアル作成及び効果的普及に関する研究—ピアカウンセリングの評価及びその効果的普及に関する研究—. 厚生労働科学研究(子ども家庭総合研究事業)平成15年度報告書, 2004.

5) 佐藤幸子, 春山早苗: 台湾の保健師に聞くSARSの経験と健康危機における保健師の役割. 保健師ジャーナル 60(8);782-787, 2004.

6) 春山早苗, 篠澤侠子, 岸恵美子, 鈴木久美子, 田中幸子: へき地の健康危機管理体制づくりにおける保健所保健師の機能・役割—へき地診療所看護職の健康危機管理に関わる活動の現状と認識から—. 厚生労働科学研究費補助金(健康科学総合研究事業)地域の健康危機管理における保健所保健師の機能・役割に関する実証的研究 平成15年度総括・分担研究報告書, 109-128, 2004.

7) 春山早苗, 呂 昌明, 田中幸子: 台湾の健康危機管理体制における公衆衛生看護職の役割と教育研修体制. 厚生労働科学研究費補助金(健康科学総合研究事業)地域の健康危機管理における保健所保健師の機能・役割に関する実証的研究 平成15年度総括・分担研究報告書, 139-143, 2004.

8) 岸恵美子: 平成16年7月, 埼玉県社会福祉協議会主催, 施設中堅職員研修として「高齢者虐待」の講義を担当した。

9) 岸恵美子: 平成16年7月, 沖縄県在宅高齢者虐待防止検討委員会委員に, 県外有識者として委嘱された。

10) 篠澤侠子: 食事と生活習慣. 自治医科大学公開講座, 2004年8月.

11) 篠澤侠子: 教育対象論. 自治医科大学看護学部臨床指導者研修会, 2004年8月, 10月.

12) 篠澤侠子: これからの保健師に期待するもの. (社) 栃木県看護協会保健師職能委員学習会, 2004年9月.

13) 春山早苗: 看護論. 栃木県看護協会実習指導者講習会, 2004年9月.

14) 岸恵美子: 長野県諏訪市, 長野市において居宅サービス従事者を対象に「高齢者虐待と事例への対応」の講義を担当した。2004年9月.

15) 岸恵美子: 千葉県船橋保健所において, 看護職・福祉職を対象に高齢者虐待事例検討会スーパーバイザーを務めた。2004年10月.

16) 岸恵美子: 神奈川県小田原市シンポジウム「地域で防ぐ! 高齢者虐待」のシンポジストを務

めた。2004年11月。

母性看護学

(1) 原著論文

1) 成田 伸, 早川有子, 川崎佳代子, 大原良子, 曾我部美恵子, 橋本かおり, 今村真杏子, 木下珠希, 富田真理子, 竹中 美, 佐藤郁夫, 松原茂樹: 母親側と支援者側双方からみた栃木県内における母乳育児支援の実態—入院中の支援に焦点をあてて—。自治医科大学看護学部紀要, 2;39-53, 2004.

2) 大原良子, 安本孝子, 新井恭子, 栗栖近子, 岡田洋子, 西平貴代佳, 佐野悦子, 杉山直子, 成田 伸: 術前訪問における不安軽減アプローチの実態調査—情報提供による不安軽減の援助—。自治医科大学看護学部紀要, 2;27-38, 2004.

3) 本田育美, 田中マキ子, 小平京子, 成田 伸, 木村 義, 奥宮暁子, 城戸良弘, 江川隆子: 看護診断「足の皮膚統合性障害リスク状態」の同定に関する研究—糖尿病患者を対象とした危険因子の検討。看護診断, 9(1);6-15, 2003.

(2) 学会報告

1) Hashimoto K., Sokabe M., Ohara R., Kawasaki K., Hayakawa Y., Tomita M., Kinoshita T., Narita S.: The situation around breastfeeding of Tochigi Prefecture in Japan? Mothers' wish and caregivers situation. 13th Congress of the Federation of Asia and Oceania Perinatal Societies, Kuala Lumpur. Apr.15, 2004.

2) Hashimoto K., Ohara R., Narita S., Sokabe M.: Introducing documentation of midwifery student during the intrapartum period. 13th Congress of the Federation of Asia and Oceania Perinatal Societies, Kuala Lumpur. Apr.16, 2004.

3) Ohara R., Narita S., Hashimoto K., Sokabe M., Kawasaki K.: Midwifery student? Learning of differences of midwifery at the three levels of health care organization in the community. 13th Congress of the Federation of Asia and Oceania Perinatal Societies, Kuala Lumpur. Apr.16, 2004.

4) 高木友子, 高草木郁江, 勝田貴美恵, 岡本美

香子, 大原良子, 成田 伸: 分娩第1期の産婦の体位および体位の変換とそれに関わる要因。第29回栃木県母性衛生学会学術集会, 宇都宮市。2004年5月28日。

5) 根岸葉子, 小越玲見, 橋本かおり, 曾我部美恵子, 成田 伸, 川崎佳代子: 産褥期における背部を中心とした全身ケアの影響について。第29回栃木県母性衛生学会学術集会, 宇都宮市。2004年5月28日。

6) 坂本光代, 舟山佳子, 小林久枝, 橋本かおり, 成田 伸: 母乳育児継続に関わる要因。第29回栃木県母性衛生学会学術集会, 宇都宮市。2004年5月28日。

7) 岡本美香子, 大原良子, 曾我部美恵子, 橋本かおり, 成田 伸, 遠藤恵子, 三澤寿美, 川崎佳代子: 栃木県の保育施設における母乳育児支援の実態。第19回日本母乳哺育学会, 佐世保市。2004年9月26日。

(3) 著書・総説

1) 成田 伸: 1. 家族にとっての出産/2. 分娩のプロセス/3. 分娩中の母児のアセスメント。女性生涯看護学 (吉沢豊予子編)。真興交易医書出版部 (東京), 439-456, 2004.

2) 成田 伸, 橋本かおり: 4. 分娩をより安楽に乗り切る方法/5. 家族の始まりとしての分娩/6. 出産の振り返りの重要性とその支援。女性生涯看護学 (吉沢豊予子編)。真興交易医書出版部 (東京), 456-473, 2004.

3) 成田 伸, 大原良子: 8. 分娩の進行に医療介入が必要な場合とその際の看護。女性生涯看護学 (吉沢豊予子編)。真興交易医書出版部 (東京), 477-481, 2004.

(4) その他

1) 成田 伸: 周産期医療・病院の変化と助産師の働き方。月刊母子保健, 540;9, 2004.

2) 成田 伸: ホルモン補充療法を経験する女性を支える看護職の役割。日本更年期医学会雑誌, 12(1);80-85, 2004.

小児看護学

(2) 学会発表

1) 朝野春美, 川口千鶴, 加藤晶子, 多田敦子, 篠澤悦子: 救急外来を受診する子どもや親/家族に対して看護職が感じている困難. 第3回自治医科大学シンポジウム, 栃木. 2004年7月3日.

2) 川口千鶴, 小原美江, 田村佳士枝, 及川郁子, 平林優子, 横山由美, 鈴木千衣, 石井由美: 慢性・長期的健康問題をもつ子どもや家族の社会資源の利用の現状. 日本小児看護学会第14回学術集会, 宮崎市. 2004年7月17日. (日本小児看護学会講演集 268-269, 2004)

3) 鈴木千衣, 横山由美, 及川郁子, 平林優子, 田村佳士枝, 川口千鶴, 小原美江, 石井由美: 慢性・長期的健康問題をもつ子どもや家族の現状—東北某県内F市とその周辺地域の場合. 日本小児看護学会第14回学術集会, 宮崎市. 2004年7月17日. (日本小児看護学会講演集 270-271, 2004)

4) 及川郁子, 鈴木千衣, 川口千鶴, 小原美江, 横山由美, 田村佳士枝, 平林優子, 石井由美: 慢性疾患を持つ子どもの日常生活の様子とサポート状況. 第51回日本小児保健学会, 盛岡市, 2004年10月30日. (第51回日本小児保健学会講演集 248-249, 2004)

(3) 著書・総説

1) 川口千鶴: 幼児. 小児看護, 27(5);531-535, 2004.

成人看護学

(2) 学会発表

1) 新貝夫弥子, 渋谷優子, 中村美鈴: 婦人科がん術後患者のセクシュアリティ障害に対する在宅支援の課題. 第18回日本がん看護学会学術集会, 東京. 2004年2月8日. (日本がん看護学会誌 18(Suppl.);159, 2004)

2) 渋谷優子, 中村美鈴, 新貝夫弥子: 婦人科がん術後患者の生活障害と在宅支援. 第18回日本がん看護学会学術集会, 東京. 2004年2月8日. (日本がん看護学会誌 18(Suppl.);191, 2004)

3) Nakamura M. & Kido Y.: Nursing assignment for gastrointestinal symptoms of post-gastrectomy

patients in Japan. Paper presented at the 5th International Nursing Research Conference, Fukushima. Oct.29, 2004. (Abstracts 67, 2004)

4) 水野照美, 佐藤禮子: がん性疼痛があり通院治療を続ける患者の苦痛と看護師の対応. 第18回日本がん看護学会学術集会, 東京. 2004年2月7日. (第18回日本がん看護学会誌 18(Suppl.);89, 2004)

5) 山本洋子, 江川隆子: 主介護者と主介護者を援助する周りの人の介護に対するジェンダーの相違と介護負担の関係. 第10回日本看護診断学会学術大会, 大阪. 2004年6月19日. (看護診断 9(2);98-99, 2004)

6) 山本洋子, 江川隆子: 看護診断「家族介護者役割緊張」の診断指標の検証. 第10回日本看護診断学会学術大会, 大阪. 2004年6月19日. (看護診断 9(2);100-101, 2004)

7) 森川浩子, 野口美和子, 友竹千恵, 土屋陽子, 大谷由香, 正木治恵, 中村伸枝, 清水安子, 古賀久美子, 出野慶子, 江川隆子, 稲垣美智子, 多崎恵子, 村角直子, 黒江ゆり子, 普照早苗, 藤澤まこと: 日本における糖尿病自己管理アウトカム指標の開発. 第47回日本糖尿病学会, 東京. 2004年5月14日. (糖尿病 47(Suppl.1);156, 2004)

(3) 著書・総説

1) 中村美鈴編著: すぐ実践で活かせる周手術期看護の知識とケーススタディ. 日総研 (名古屋), 2004.

2) 中村美鈴: 手術看護と手術看護記録—推奨できる手術看護記録の内容と様式—. 月刊かんどろく, 13(10);33-37, 2004.

3) 中村美鈴: 手術看護と手術看護記録—術前訪問を生かした手術中の看護とその記録—. 月刊かんどろく, 13(11);31-41, 2004.

4) 中村美鈴: 手術看護と手術看護記録—手術中の看護とその看護, そして術後訪問へ—. 月刊かんどろく, 13(12);33-48, 2004.

5) 中村美鈴: 子宮全摘出後の排尿障害と看護支援. 看護技術, 20(5);41-46, 2004.

6) 渋谷優子, 中村美鈴, 新貝夫弥子: 子宮がん術後患者の生活障害と看護支援システムに関する実態調査報告. 看護技術, 20(5);60-45, 2004.

7) 中村美鈴: 主体的に情報収集し, 看護過程を自ら展開できる思考力を育成する指導. 実習指導と看護教員, 1(4);11-17, 2004.

8) 中村美鈴, 高木初子, 村上礼子, 町田恵子, 大本陽子, 大河内由紀: 術後せん妄を引き起こした成人の手術と看護. すぐ実践で活かせる周手術期看護の知識とケーススタディ. 153-160, 日総研 (名古屋), 2004.

9) 江川隆子, 今井雪香, 大川明子, 加藤宏子, 藤原正恵, 山本洋子, 瀬田友子, 不破有子, 矢部淳子, 笠岡和子, 増田紀子: 江川隆子のかみくだき看護診断 (第3版). 日総研 (名古屋), 2004.

10) 村上礼子: 呼吸器疾患をもつ成人の手術と看護. すぐ実践で活かせる周手術期看護の知識とケーススタディ (中村美鈴編集). 日総研 (名古屋), 137-145, 2004.

11) 村上礼子: 低栄養状態にある成人の手術と看護. すぐ実践で活かせる周手術期看護の知識とケーススタディ (中村美鈴編集). 日総研 (名古屋), 146-152, 2004.

12) 村上礼子: 患者に対しての関心を高めるための指導例. 看護教員と実習指導者, 1(6);29-33, 2004.

13) 友竹千恵, 小平京子, 村上礼子, 中村美鈴, 塚越フミエ: 外来に通院する糖尿病患者の生活上の困難さ. 自治医科大学看護学部紀要, 2;17-25, 2003.

(4) その他

1) 江川隆子, 本田育美, 笠岡和子, 鷹井清吉, (執筆協力 山本洋子, 雪香紙野, 清水久美子, 宮崎澄江, 酒井京子, 戸沢ゆみ子, 塚野倫子, 熊原澄江): ゴードンの機能的健康パターンに基づく看護過程と看護診断. ノーベルヒロカワ (東京), 37-38, 2004.

老年看護学

(2) 学会発表

1) 福屋靖子, 入江多津子, 白倉京子, 永原久栄, 星野晴彦, 水戸美津子: 介護保険制度に伴う地域ケアサービスの連携についての動向. 第5回日本リハビリテーション連携科学学会, 茨城. 2004年3月21日. (日本リハビリテーション連携科学学会第5回大会論文集 78-79, 2004)

2) 永原久栄, 入江多津子, 白倉京子, 星野晴彦, 水戸美津子: リハビリテーションの視点からみた

ケア目標の設定と課題. 第5回日本リハビリテーション連携科学学会, 茨城. 2004年3月21日. (日本リハビリテーション連携科学学会第5回大会論文集 82-83, 2004)

3) 笠井恵理, 亀山直子, 水戸美津子: 聴覚障害のある通所施設利用高齢者へのレクリエーション活動の実態調査. 第46回日本老年社会学会大会, 仙台市. 2004年7月2日. (老年社会科学 26(2);172, 2004)

4) 山崎裕也, 亀山直子, 水戸美津子: 動物介在活動による高齢者の変化に関する考察. 第46回日本老年社会学会大会, 仙台市. 2004年7月2日. (老年社会科学 26(2);180, 2004)

5) 亀山直子, 水戸美津子: 臨地実習指導者への教育のありかた. 第15回日本カリキュラム学会, 上越市. 2004年7月4日. (第15回日本カリキュラム学会 177, 2004)

6) 水戸美津子, 林 滋子, 松下由美子ほか12名: 病院看護師の生涯学習ニーズ-山梨県における調査 (その1). 第35回日本看護学会-看護管理, 徳島市. 2004年10月27日. (第35回日本看護学会抄録集-看護管理- 195, 2004)

7) 松下由美子, 林 滋子, 水戸美津子ほか12名: 病院看護師の生涯学習ニーズ-山梨県における看護管理者の調査. 第35回日本看護学会-看護管理, 徳島市. 2004年10月27日. (第35回日本看護学会抄録集-看護管理- 196, 2004)

8) 千田みゆき, 林 滋子, 水戸美津子ほか12名: 訪問看護師の生涯学習ニーズ-山梨県における調査- 第35回日本看護学会-看護管理, 徳島市. 2004年10月27日. (第35回日本看護学会抄録集-看護管理- 197, 2004)

9) 小田切陽一, 内田博之, 水戸美津子: APC分析による日本人高齢者の死亡動向の解析. 第63回日本公衆衛生学会, 松江市. 2004年10月29日. (第63回日本公衆衛生学会総会抄録集 202, 2004)

10) 鳥飼紀子, 横山のぶ子, 大神ヨシ子, 内海香子, 野口美和子, 清水安子, 黒田久美子: 虚血性心疾患を合併する糖尿病患者に対する小規模グループ指導プログラムの開発. 第9回日本糖尿病教育・看護学会, 松山市. 2004年9月18日. (日本糖尿病教育・看護学会誌 18(特別号);213, 2004)

(3) 著書・総説

1) 高木初子: 関連図の書き方をマスターしよう

一. 大腿骨頸部骨折患者の関連図の書き方 (吉谷須磨子編集). 医学芸術社 (東京), 248-259, 2004.

2) 高木初子: 周手術期看護の知識とケーススタディ. 呼吸器疾患をもつ高齢者の手術と看護 低栄養状態にある高齢者の手術と看護 術後せん妄を引き起こした高齢者の手術と看護 (中村美鈴編集). 日総研, 110-124, 2004.

(4) その他

1) 水戸美津子, 林 滋子, 松下由美子ほか12名: 看護職者の生涯学習ニーズとその支援状況ー山梨県における調査ー, 平成15年度山梨県立看護大学大学院共同研究成果報告書, 全29頁, 2004.

2) 水戸美津子, 林 美鳥: 老年患者とのコミュニケーション, ナーシングカレッジ, 8(14);76-81, 2004.

3) 内海香子, 神山幸枝, 高木初子, 余語琢磨, 篠澤悦子, 野口美和子: 軽度の脳血管障害を発症した前期高齢者のセルフケアー身体的・社会的影響, 病気の受け止め, セルフケアに取り組む気持ち, セルフケア行動からの検討ー. 自治医科大学看護学部紀要, 2;55-61, 2004.

資 料

2004年度 (平成16年度) 年譜

平成16年	4月5日 (月)	ガイダンス・授業開始 (2・3年)
	4月8日 (木)	オリエンテーション (1年)
	4月9日 (金)	入学式
	4月12日 (月)	授業開始
	5月14日 (金)	自治医科大学創立記念日
	7月27日 (火) ~ 30日 (金)	定期試験 (1・2年)
	8月2日 (月) ~ 9月26日 (日)	夏季休業
	9月8日 (水) ~ 10日 (金)	再試験
	9月27日 (月)	授業開始
	10月8日 (金) ~ 10日 (日)	学園祭
	12月24日 (金) ~ 1月4日 (火)	冬季休業
平成17年	1月25日 (火) ~ 1月28日 (金)	定期試験 (3年)
	2月22日 (火) ~ 25日 (金)	定期試験 (1・2年)
	3月10日 (木) ~ 14日 (月)	再試験
	3月22日 (火) ~	学年末休業

自治医科大学看護学部の概況 (平成17年3月31日現在)

1. 教員数	38名
2. 学生数	308名
3年生 (平成14年4月1日入学)	107名
2年生 (平成15年4月1日入学)	99名
1年生 (平成16年4月1日入学)	102名

教職員名簿

1. 教員

職名	氏名	主要担当科目
学部長	野口 美和子	
教授	川口 千鶴	小児看護学
教授	篠澤 侁子	地域看護学
教授	高村 寿子	健康教育論
教授	竹田 俊明	人体の構造と機能
教授	竹田津 文俊	疾病と病態
教授	永井 優子	精神看護学
教授	永嶋 フミエ	成人看護学
教授	成田 伸	母性看護学
教授	松田 たみ子	基礎看護学
教授	水戸 美津子	老年看護学
教授	渡邊 亮一	保健医療情報学
助教授	西岡 和代	精神看護学
助教授	春山 早苗	地域看護学
講師	朝野 春美	小児看護学
講師	大久保 祐子	基礎看護学
講師	大原 良子	母性看護学
講師	岸 恵美子	地域看護学
講師	里 光やよい	基礎看護学
講師	曾我部 美恵子	母性看護学
講師	高木 初子	老年看護学
講師	中村 美鈴	成人看護学
講師	水野 照美	成人看護学
講師	山本 洋子	成人看護学
講師	余語 琢磨	文化人類学
助手	内海 香子	老年看護学
助手	岡本 美香子	母性看護学
助手	亀田 真美	基礎看護学
助手	川上 勝	基礎看護学
助手	黒田 光恵	成人看護学
助手	佐藤 幸子	地域看護学
助手	鈴木 久美子	地域看護学
助手	関 澄子	精神看護学
助手	多田 敦子	小児看護学
助手	角田 こずえ	基礎看護学
助手	日向 朝子	精神看護学
助手	林 美鳥	老年看護学
助手	村上 礼子	成人看護学

(各職名ごとの50音順)

2. 事務部

職名	氏名
事務部長	小林 眞

(看護総務課)

課長	藍原 孝樹
参事(兼)	菅 俊夫
課長補佐	
係長(兼)	半田 美治
主任主事	石 倭ユリ子
主事	松本 則子
主事	川村 仁美

(大学院看護学
研究科設置準備室)

室長(兼)	菅 俊夫
係長	半田 美治

(看護学務課)

課長	中田 福治
係長	安島 幸子
主任主事	笠倉 昇
主事	松本 恵美子
主事	宮田 弘美

編 集 後 記

本号は、2004年4月1日から2005年3月31日までの1年間の自治医科大学看護学部の活動の概要をまとめたものである。

本号では、特別報告として、成人看護学の中村美鈴教授に、栃木県保健福祉部健康増進課が生活習慣病予防対策の一環として進めている若者向けのリーフレットの作成に指導助言者として関わった経験をご執筆いただいた。これには、本学部の学生も参加しており、平成15年度および平成16年度の2年間に、「糖尿病」と「適正体重」をテーマにした2冊の若者向けのリーフレットが作成された。同世代の若者によるカウンセリング（ピアカウンセリング）と同様、若者の行動変容を促す取り組みとして注目される。

また、精神看護学の永井優子教授に、2005年3月3日に発足した日本ルーラルナーシング学会についてご執筆いただいた。日本ルーラルナーシング学会は、野口美和子看護学部長が理事長を務め、自治医科大学看護学部の教職員が中心になって設立された学会である。永井教授の原稿にも記載されているとおり、2005年4月2日と3日に、この学会の設立を記念して、国際研究集会が行われた。参加者は決して多いとはいえなかったが、熱気のあふれる講演や討論が行われた。看護のなかで新たな領域を開拓する学会として今後が期待される。

本号は、当初は2005年12月末に発行する予定であったが、諸般の事情により約3ヵ月遅れの2006年3月末発行となってしまった。これは、ひとえに編集委員会の責任であり、関係各位に深くお詫び申し上げる次第である。

(編集委員長：渡邊亮一)

年報編集委員会

委員長	渡邊 亮一 (自治医科大学 看護学部 保健医療情報学)
委員	竹田津文俊 (自治医科大学 看護学部 疾病と病態)
	成田 伸 (自治医科大学 看護学部 母性看護学)
	春山 早苗 (自治医科大学 看護学部 地域看護学)
	水野 照美 (自治医科大学 看護学部 成人看護学)
	真砂 涼子 (自治医科大学 看護学部 基礎看護学)
編集担当	松本 則子 (自治医科大学 大学事務部 看護総務課)

自治医科大学看護学部年報 第3号

平成18（2006）年3月30日発行

発行者 自治医科大学看護学部
学部長 野口 美和子
編集責任者 自治医科大学看護学部年報編集委員会
委員長 渡邊 亮一
発行所 自治医科大学看護学部
栃木県下野市薬師寺3311-159
電話 0285（44）2111(代)
印刷所 (株)松井ピ・テ・オ・印刷
栃木県宇都宮市陽東町5-9-21
電話 028（662）2511(代)